

EDITABLE LIFE

TAKUMI OHGA



DEAD LOTUS MEDIA

目次

目次

2 小説 地下水（未完）

2 1 POETRY

2 3 小説 洞窟の比喻

5 8 POETRY

6 9 小説 Monochrome

小説 地下水（未完）

月から見ると地球は欠けている。月面のクレーターは灰色の土にできた巨大な雨跡のようだった。地平に広がった灰色を、漆黒の宙の色が際立たせている。月面は青い空がないせいかな廢れているように思えた。地球の美しい青さは遠い宙の向こうにあり、半分に欠けている地球の姿は、寂しさを誘う。母なる地と別れた月面は異界のようで、彼は曲がっている月の地平線を眺めていると、自分の感覚も歪んでいくようだった。無重力の状態で体は浮遊して幽体になったような気がしていた。

月にある家の窓辺には椿の鉢植えがあった。月でも生きられるように、養分を補う為の機械が接木されており、植物はサイボーグ化されている。窓辺に見える半球に欠けている地球と、機械なしでは生きられない椿の鉢の侘しさが相まって、現在の宇宙では機械がないと生きられない境遇の悲しさを詠っている。花は機械の接木をしているので、枯れることなく咲き続けることが出来るが、彼は敢えて枯れるように設定しているため、花のいくつかはごろりと首から落ちて散り、少し腐食していた。月にはない四季を散り行く花は思い出させてくれた。

彼は月で墓守の仕事をしていた。信じている神もなく、死んでも地球に居場所が見つからなかった人々の骨が月にやってくる。ここはさながら冥府で、月に広がる灰色の大地に骨が埋められていた。地球から見る月は、美しい金色で優しく輝いていて、星に満ちた夜を頬で一晩中撫でており、月に埋められた亡き人々は夜の間ずっと死に別れた人を見守るように夜空を浮かんでいる。墓になった月は地上で人の死を象徴するような存在になっており、故人を偲ぶ人の悲しさをなぐさめていた。

月が墓地になってから、多くの人が旧来の宗教観を忘れていった。死者の象徴として月は毎晩現れ、反対に昼間は太陽が生象徴として現れる。天体のサイクルと死生観は同期してしまっただけで、宗教は自然のサイクルにとけ込むように消えて行き、世界だけが宗教に取って代わった。宗教が持っていた教理は、エコロジーの思想へと変わっていった。地球を愛して慈しみ、利他的に生きて行くことを説いているのは、宗教もエコロジーも変わらなかった。

彼の墓守の仕事というのは、主に死者の記憶データの管理だった。テクノロジーは人の記憶や夢をデータ化できるようになっており、月ではそのデータが暗号化されて死者とともに保管されている。

彼は今日、ある老人の記憶を遡ることにしていた。タンクの中に入り、すべての感覚を遮断してくれるアイソレーションタンクの中に入る。音は遮音しているため無音で、何の光もない真つ暗闇の中で眠った。自分の息づかいだけが聞こえ、あとは頭に思い浮かぶ彼自身の思考しかなく、それ以外はもうなにもないようだった。彼は深く落ちて行くようにある老人と彼の子供のころの記憶を遡った。

子供だった頃の彼には世界は何もなかった。何もかもが特別な意味などなくて、世界の広さは家と近所でしかなく、世界にいる人は家族や親族、そして数名の近所の友達だけだった。考えるということなどなく裸になった感覚は、遊び心を歓喜で満たし、恐怖心で自分自身を守った。箸ひとつ握っても、箸の本来の機能など関係はなく、ただの一本の棒であり、おもちゃの武器やものをたたいて音を出す楽器にもなる。言葉については自分に必要な言葉には反応できるが、それ以外の言葉はただの音とリズムでしかない。広大な宇宙が広がっているという知識もないので、身の回りの自分の世界こそが世界の全体だった。見るものすべてが単なる形として見ており意味などは感じず、音は環境音とリズムやメロディーの違いなどなく、ただ

ありのままの音として感じられていた。

彼は家にかくれんぼをしていた。机の下や押し入れの中に隠れ、日常の世界から姿を消した。彼にとってはその場所は誰も知らない秘密の場所で、世界から切り離された別次元だった。机の下に隠れ、そこから覗き見た部屋は防犯カメラから部屋を眺めるように俯瞰されていた。隠れたところには、自分の好きな物を持ち込んで遊び、自分の世界に入り込む。隠れた場所は自分だけの世界であり、現実に現れない頭の中の意識のようだった。

隠れているのを見つけられるのも喜びだった。ずっと誰にも見つけてもらえなければ、彼にとっては本当に世界から消えてしまうのと変わらない。死んでしまったようなものなのだ。いなくなった自分を人に探してもらえるのは現実に生き返るということであり、なぜか愛しい暗闇の死の領域と別れをつけることだった。この生死の境界を遊べばかくれんぼだし、本当に消えてしまえば、それは死ぬことと変わらない。ただ、こどもの頃の彼は、もちろん生死云々のことなど考えもせず、ただ躍動する楽しさに任せて遊んでいるだけだった。

ある時、彼が一人で家の机の下に隠れ、そのまま眠りについたことがあった。家

族は彼を見つけることができず、家を探しまわり、一向に見つけることができないので、警察に失踪届けをだそうとしていた。彼は目が覚めて、家族が自分を探しているのに気づいてはいたが、真剣に探す家族が恐ろしく感じられて、隠れ場所からは出なかった。ようやく家族が彼を見つけた時には、彼は恐怖と安堵が入り交じって、ただ涙を流した。彼は長い間隠れていた時間は、遊びでもなく、失踪をしたわけでもない。ただ、誰からも忘れられて、一人取り残されている状態は、彼にとつて生と死の間にいるような思いがしたのだった。

やがて彼は外で遊ぶようになり、誰も知らない隠れ場所を自分の秘密基地だと思ふようになった。家とその近所だけが世界そのものの広さであるその頃の彼にとつては、だれも知らないその秘密基地は亜空間のようであり、現実と向き合つて行く拠点になった。その場所は人の気配がない物陰でしかなかったけれど、その薄暗さと冷たさは現実から彼を守った。その秘密基地へと彼を誘う苔がむした路地裏は、冥府につながった道のようにだった。裏通りの奥へ入り込むほどに、彼にとつて世界と向き合うための基地がそこにあり、その場所は彼にとつては世界を生んだ中心地のようにすらあり、その場所以外の現実とは幻想のように思えることもあった。

入りくんだ裏道を行くと、家々の死角になる場所に古い井戸があった。そこが彼の秘密基地だった。その井戸はある老父が手を入れているおかげで今でも使えるようになつており、暗闇の奥底に声をかけると綺麗に残響が響き、時折ぼつりと潤んだ水の音が聞こえて来る。彼はその荘厳な響きに心も澄んで、気持ちひたひたに静まった。畏敬の念がそう思わせた。そこを覗き込むと息すらも響いて聞こえる。底などなくて虚空の彼方へと続いているように思えた。ここが彼にとつての秘密の場所だった。

ある時、井戸の側でぼうっと耽っていると、老父が突如そこにやって来ていた。老父は無表情な顔で彼を見たのだけれど、彼は秘密の場所にいたことを叱られるのではないかと思い、慌てて逃げ去った。彼にとつてはここにいることは誰にも知られてはいけなかつたし、この老父に見られたことによつて、もう秘密の場所ではなくなつた。老父は彼と秘密の世界の密事を見た目撃者となつた。

老父は彼の家の近くにある旧家の家主だった。街はすっかり新興住宅に様変わりしてしまつたが、時の経過は老父の家を古びさせず、むしろ時を経ても変わらず超

然としている威厳ある旧家だった。老父は妻に先立たれて、ながらく一人暮らしをしており、それからは時計が止まったように、昔と変わらない生活をずっと送っていた。その生活の中で、今でも老父は井戸を使い続けていた。老父が井戸を主に使っていたのは、子供時代の時からで、老父はこの井戸を使っていた子供の頃を忘れず、ずっとこの井戸を使うように管理をしていたのだった。この老父も子供のころはこの井戸に神秘を感じており、それを絶やしたくなかった。老父は子供のころに、この井戸には水神が宿っていると親に言い聞かされてことを忘れておらず、おまじないでも信じるように井戸を守り続けた。

老父は彼が自分の子供のころと重なって見えた。老父にとっては、歳を重ねてきた今でも、この井戸に不思議な魅力を感じていた。だからこそ、自分と同じ様な子供の彼を見て、一緒に童心に戻ったような心地がするのだった。今の老父は井戸の底が地下水脈につながっていることは知識としてわかっているのだけれど、子供のころに思っていたように、井戸の底は神秘につながる未知の深淵だと思いたかった。

老父は井戸から湧き出た美しい水は澄んだ夢のようなものだと思っていた。老父はこれまでの人生の記憶を振り返っても一瞬の夢にしか感じられず、自分は井戸の

中の一滴の水でしかないと思うことがあった。その一滴が集合して、清らかに大地から湧いているのは、あらゆる生の源泉がここにあるとすら思え、老父にとつて井戸の水を飲む事は宗教のような神性があり、水を飲み続けることは儀式だった。日々水を飲んで、老いていくにつれて、老父の気持ちも水のように無色透明な爽やかな気持ちになった。世界の中、社会の中、仕事の中、生活の中での自分自身を水のように澄んだ明るい諦念で世界の中へと溶け込ませたかった。

彼は老父に出会った後、走つて家に帰り、また暗がりに隠れた。あの井戸には自分が行つてはいけない場所なのだと、身を屈めて、老父を見た瞬間を思い出し、脳裏によぎる記憶に怯えていた。井戸へ向かう裏道も、行く時はだんだんと秘密にせまり冒険するようにわくわくしていたが、老父に会つてからは、彼は禁忌をおかしてしまったために自分が呪われてしまったように思え、恐怖心に堪えるばかりだった。彼は、自分は遠いところに行き過ぎてしまった、世界の裏側に行き過ぎてしまった、とすら思った。

母親が彼を呼ぶ声が聞こえた。彼方にいる彼を、現実へ呼び戻すように、母親の

声は響いた。駆けて母親のところへ戻った時には、もうすっかりと恐ろしさなど消えて、何事もなかったかのように、いつもの何もない世界に戻っていた。彼が自分の記憶と向き合うのは、隠れて暗闇の中にいる時だけで、人前に出るとすっかりと消えてしまう。記憶や思い出といった自分の内にある意識というものの意味すら分かっていない子供の彼にとっては、隠れることこそが、自分の内にある意識と向き合うことであり、人前にでるということは、ただただありのままの現実を受け入れて、世界から自意識は消えて何もないように感じられた。人前で自分の内側を省みることなんて彼にはできず、自分の意識に入りこみたい時は、密かに人目から隠れるのだった。

子供の彼にとって、何もない世界というのは自意識のない世界なのだった。反対に、自意識が湧いてくれば彼は現実から隠れようとする。母親と過ごすいつもの日常は、母親と彼が作り出す世界であって、彼の自意識は世界に染み込んで隠れていた。彼の自意識は、地下水のように地面の下で世界に覆われて眠っているようだった。彼が井戸に惹かれたのも、世界と地下をつなぐ働きをしていたからだ。彼は井戸の奥に、広大に眠っている自意識を感じ、水の冷たさと清らかさは、彼を不

思議と落ち着かせていたのかもしれない。

子供のころの記憶の中にいた彼は、眠りから目を覚ましたけれど真つ暗闇の中なので、目覚めているのか起きているかわからなかった。体を動かしてようやく、自分が現実に戻って来たのだと気付く。彼にはもう夢と現実の境界は曖昧になっていた。タンクを出ると窓越しに青い地球が見える。彼が子供のころに感じていた、現実の世界や自意識が眠る地下水の神秘も今ではすっかりこうして外から眺められ、地球そのものが一滴の雫のように思えた。井戸の奥に感じていた神秘の暗闇は、もはや地下ではなく、あたり一面の宙に無限に広がっている。そこに一滴の雫が湧いたように地球が浮かんでいる。地球から果てなく遠いところに彼はいるのだが、彼の心持ちは暗闇の中で一滴の雫を見ているのとさして変わらない。

彼の部屋のテーブルに触れると、デスクトップの画面が写し出された。手が触れていないときは、スクリーンセーバーと同じ効果で、机は木目調をしてインテリアとして擬態していたが、ディスプレイの様変わりして、ガラスの表面にホーム画面が写し出された。さっき見た感覚を忘れないようにブックマークし、それはメモで

もとるように簡単に行われた。彼の頭に埋められたチップはインターネットにつながっている。彼の思考そのものがソフトウェアになっていて、ハードウェアはデスクトップではなく、そのまま机のような家具になっていた。今ではあらゆるものがインターネットに繋がっている。生活をする上で手に触れるものだけが、ハードウェアとなつて残り、日々の暮らしの様々な道具達は絶滅したように消えてしまい、部屋はとても簡素で素朴なものだった。太古の遊牧民族の住まいのように、最低限の種類しか部屋には無くなっていた。彼は机を簡単になぞるだけで、自分の記憶のブックマークを終えた。指先の軌跡は、古代人が洞窟に初めて線や点で描いた壁画のようにシンプルだった。夢をわずかに触れるだけで保存するのと、古代の人々が単純な幾何学形を描くのも、情報を生み出し保存しているという点では共通している。

彼は朝食の仕度をしながら、とある一日の朝食と、一生のあいだに生きるために食べることもさして変わりはないのだ、とそんなことをぼんやりと考えていた。

彼の朝食は皿をつくることから始まる。皿は3Dプリンターで整形をするだけなので、すぐに出来る。日常の道具は、このプリンターで作つてすぐ使い捨て、使い終えた樹脂でまた違う道具をつくつて使い回す。毎朝つくつている皿の造形は、日々

理想の形を追い求め姿を変えている。日々かわりゆく流線型は彼の美意識が鼓動し、進化していくようだった。ただ、理想的だと思う皿が出来たと思っても、すぐに嬉しさは去ってしまい、食べ終えるころには次の皿をどう造ろうか思い巡らせていた。すぐに皿は割られてしまう。皿は古代の土器のように脆く世界を去って行った。つかうのは一瞬、つくことは一生続ける。生活を創造に委ねていると、その永続性を思うあまり、一瞬と一生の違いは時間の感覚がないという点でさして変わらないように思えた。

窓から見える銀河と地球に目をやり、果てた思いでぼんやりした後、彼は自分の夢や記憶の編集を始めた。彼は自分の記憶や夢のアーカイブをカテゴリに分けて保存しており、編集して日記のように自分の生涯を綴っていた。先ほど夢見た祖父との記憶をこどもの頃の思い出の一つに入れた。この記憶は月に住むなんてことは出来なかった時代の記憶だ。母なる碧い星に抱かれて、そこから離れて感じる孤独などまったく知らないで、自分が世界の中心にいたと思えた時代だった。彼は再び遠くにある地球をみていた。そして、再びアイソレーションタンクの中に入り、以前にブックマークをした祖父との記憶を改めて遡るためうたた寝をした。

一面に真つ青な青空が広がっている夏の日だった。積乱雲は怒濤の迫力で幽玄な白い山のようなだった。子供時代の彼は小学生の低学年になった。彼はその前に座って眺めていると、ディスプレイは光に溶けた世界をのぞく窓辺のようだった。使いこなすことはまだできなくても、生活の中でマルチメディアの魔法のような不思議さに惹かれていた。ただ、まだ駆け回って笑い声をあげているのが大好きで、pcは扱えない。ディスプレイを眺めていると、冷たく黙り込んで固まってしまう自分が少し恐ろしかった。今日は夏休み中の昼下がり、外からは蟬の鳴き声が、電子音のように響き渡っていた。

ディスプレイの光の前では、気持ちには冷たく醒めていった。この冷たさは過去に覚えた井戸の冷たさに通じていた。鮮明すぎる光を放つディスプレイが休止画面になった時の真つ黒な画面が、井戸の奥にある暗闇のようだ。彼は再び日常を離れた秘密めいた時間を迎えようとしていた。ただ、井戸に感じた神聖さや清さというよりも、悪魔的で呪術のような誘惑を感じた。ディスプレイにうつる休止画面のスクリーンセーバーは、虹色の光が流線を描いて渦をなし、無限に湧き出ている。

少年の彼は永遠という言葉の意味も知らず、果てのない変化をじっと眺めた。見入ってうすら寒くなったので、果てのない情報空間ではなく、彼は現実世界に遊びに出かけることにした。

老父は、過ぎゆく時間に忘れられ取り残されたような古い喫茶店を営んでいた。時代が変わっても続いているのは、井戸水で入れたコーヒーが美味しく、店内に流れる音楽とレトロな雰囲気が愛されていたからで、一部の好事家は年齢を問わず訪れていた。そのおかげで、老父は時代の流れに合わせて生きていくことなどしたことがなく、喫茶店を始めた青年のころとさして変わらないまま年月を重ねた。老父は老いた自分の顔を鏡で見ても、ただ玉手箱を開けてしまっただけのような気分、心は青年のままなのだと思うときもあった。小さな店内には不似合いなほどに良いサウンドシステムでジャズをかけて、店内は青い風が通り抜けているようだった。渴いた夏の陽気に Albert Ayler の Spiritual Rejoice を流していた。狂った聖者が行進しているようなその曲に、調子のずれた福音が鳴り響いていた。

窓辺から見える、暑く熱したアスファルトの上を踊る陽炎に、老父は白昼夢を見

ていた。子供の頃からいつも追いかけている自由が、陽光に姿を変えて、ゆらゆらと遠くで揺れている。老父の心に確かにあるはずの自由は、掴もうとするといつも途端に姿を消して、遠くへいつてしまう。いつも景色の奥にある気がするのだが、その場所へ辿り着いても、また、その場所から先へと自由は過ぎ去ってしまう。老父は夏の陽射しを見ながら、裏切られた自由への叫び声を心の中で上げているが、老父は静かに佇んで、現実を歪ませる陽炎をただ眺めていた。老父にとつての夢とは、睡ってみる無意識の非現実というよりは、あまりにも掴みどころがなく、常に儚く消えて行く現実そのものの方が夢のようだった。

老父が見つめていた四角い窓枠の中に、少年の彼は現れた。見ていた白昼夢の中に無垢な少年が現れると、一転して微笑ましい気持ちになった。息子のいない老父は子供を見ても息子と重ねて見るのではなく、自身の少年時代に重ねて子供を見る。老父の子供時代の記憶は、いたるところが欠けていたが、子供を見るとその隙間が満たされて童心にかえるような思いだった。ただ、老父は子供の彼に笑顔で笑い返しながら声をかけることはしない。大人のふりをして子供のように扱うことは、子

供に対して失礼だと老父は思っており、たとえ子供でも対等な立場で敬意を持つて接するのが常だった。老父は、近所の人にするように、軽く会釈をした。

子供の彼は未だ知らなかった大人の敬意に、子供ながらも緊張した。彼は会釈を返したが、その顔は未知なものを伺うようだった。老父の店の雰囲気が普段見かける街の中のお店とは少し雰囲気が違うと子供ながらに感じた。なんの先入観もない子供にとっては、この店も異次元のようなのだった。コーヒーの香りが染み付いた空気が、この店が彼を脅かすものではないのだとやさしく説き伏せてくれる。柔らかく甘い焦げた香りは、子供の彼を大人にさせるようだった。彼は初めて哀愁を知る。ランプが灯る薄暗い店内では、太陽の光から夜が隠れているように思えた。

子供の彼にとっては、大人とさえ陽光のように暖かい父や母の愛情しか知らない。正体のわからない影や暗闇は、喫茶店の中で長閑にまどろんでいる。店内は、彼がよく隠れていたあの暗闇に通じる安心感が感じられた。リラックスしてきた心に身も任せていると、本当に眠気がやって来た。老父に別れの会釈を終えようと、店裏の片隅に座り込み、店内からもれて聞こえる音楽を子守唄にして、無意識の中に眠り入ってしまった。

老父は彼に会釈をした後は再び一人で音楽に聴き入りながら仕事を続けた。今度は Eric dolphy ばかり聞いていた。自分で淹れたコーヒーを飲みながら、音楽が老父の肌に触れていく。眠れない深夜のように興奮し、青写真になれなかった臃げで未完成なイメージや記憶たちが、走馬灯のように反芻していく。老父の想像力は、実体になれていないことを怨むゴーストのように幽白としている。狂いあがる合間には忘れたように美しいメロディーが響き、肉体を忘れさせ、自らが旋律に変わったように、空虚の中を意識は風のように疾走していった。

音楽は部屋のようにその中へ老父を住ませ、曲ごとに空間から空間へと様々な世界に誘った。音楽は老父と現実の間にフィルターをかけて世界を変容させる。時には現実を忘れさせて、老父を仮想世界に連れて行くようだった。音の世界には実体はないが、確かな知覚があり、その地平は果てしない。老父の思考の中に生まれた異次元は、五線譜で組み立てた時計仕掛けの世界の中で目紛しく変容していた。

老父は何度も音の世界の遠くに行った。自分の意識の奥に入り込むような感覚で、久しく隠れていた何かと邂逅する。血が湧いて疾走していく感覚はどこまでも先へ

行けるような気にさせる。何の根拠もない子供じみた自信は、馬鹿げてはいるが確かに感じていたし、気の合う旧友と遊んでいるようにどこか懐かしかった。この感覚が長年老父を麻薬中毒者にさせるように魅了し悩ませてくれた。どこへ行くともわからず、心を果てまで進ませる。心が帰って来れなくなってしまうえば白痴と何も変わらない。どこか病的でもある精神の跳躍だった。音の内側にある世界は果てし無く、音の先に永遠というものがもしあるならば、魅惑と危険があるものだ。老父は時を重ねるほどに感じていったのだった。

音楽を止めて、日常の音に耳を澄ませた。音楽を聴いていない時間の方が、一日の中で老父にとっては少ないので、車の音や、何気ない物音、断片的に聞いており意味はわかっていない人々の話し声など、日常的な音が特異に聞こえる。世界は開かれていて、ただ生きている生活こそが音楽のように空虚で姿もなく、解放されていると思える瞬間だった。そして、老父は生活の音を愉しむために、仕事に取り掛かる。水のおとや、テーブルを拭く音、箒で掃く音が連れていくくれる素朴な幸せへと向かうため、仕事や生活の中に自分を消し去り、夢を見たがる自己の内側を諦めていった。一仕事終えて、扉から差し込んでくる光に気持が洗われたくなり、

外へと出た。

外に出ると、店の物陰で子供が眠っていた。意識を失って死んでいるのかと思いはつとしたが、無意識に目をこすり、寝惚けた声が聞こえたので夢の中にいるのだと安心した。起きていれば夏空のように活発な子供だけに、寝姿はいっそう穏やかで花の蕾のようにじっとしていた。

喫茶店の椅子に運ばれた子供の彼は眠りから目覚めようとしていたが、起きた場所から覗いていた異次元のような喫茶店の中だったので、まだ夢の中にいるのだと思えた。老父から連絡を受けて迎えに来た母親に抱きかかえられてやっとこれは現実なのだと彼は思う。そして、彼は心配をしていた母の顔を見て初めて自分は母親を心配させるような状況だった事を知り、涙を流した。

POETRY

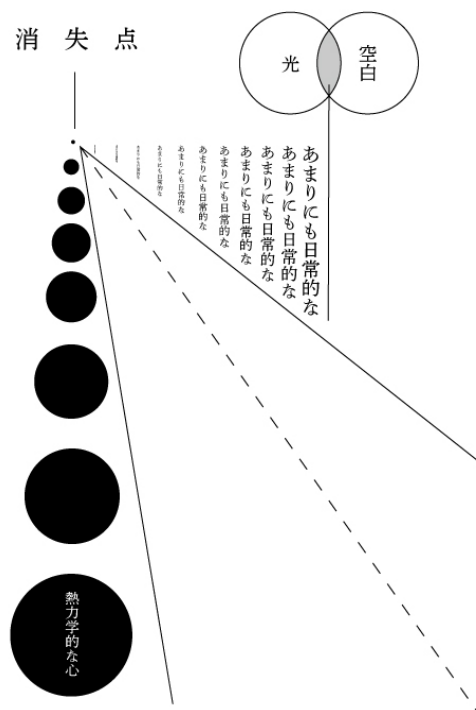
ガラスごしの対人関係

フィルム状のカレンダー

ペンになった矛盾

隠した白いナイフ

消 失 点



小説 洞窟の比喩

洞窟の入り口は、体積した土が時代の経過を物語るように入り口を殆ど覆い、岩肌に絡み茂る蔦はそびえる崖に執念深く這い上りたがっているようだった。洞窟の入り口の周囲には樹齡を重ねた木々が森の栄誉を称える神殿のように太い幹を柱にして静かに立つており、洞窟の前を伽藍に変えて、日だまりが泉のように広がっていた。山の奥で感じる湿った空気は、木々に覆われて風を知らないのです、清楚で気品があり、息をして吸い込むと麗しい。ただ、山中の無人の静けさは恐ろしく、何を起こすかは解らない緊張を自然は感じさせた。この場所へ通じる道はなく、人が訪れる理由など何もない。ここは道から外れて山の奥へ奥へと進まなければ辿り着けない場所だった。

この洞窟を囲う静けさを裂き、一人の男が洞窟の口の隙間から這い出てその場に倒れ込んだ。汗をかいていた彼の肌についた土は、陽の光に暖められた土の匂いをおおらせ、彼を目覚めさせた。彼にはその香りが新鮮で愛おしく、土に身を預けて暫く倒れ込んでいた。顔を上げて周囲を見渡すと、自然の姿はみずみずしく、どこ

を見ても新しい。見れば見る程に色彩の奥深さと明瞭な輪郭に気づいた。自然の中にいると、自分もその中の一歩でしかないように思え、消えていく自意識に、自身から解放されて自由を感じる。自意識に囚われた彼とは違い矛盾など持っていない無私の自然は、とても理性的に冷たく彼を論じたのだった。

彼がふと見上げた崖の岩肌は、厳格に立ちはだかつており、緑色に覆われた山中の景色に緊張感を与えている。崖は木々を脱いだ山の素肌のようだった。山の正体を見たように彼は思った。それは山そのものに感じる悠久が裸になって現わした本性のように感じた。岩崖は山嶺に突如として現れるノイズのように白黒の肌を剥き出しにしていた。

ふと一枚手元に落ちて来た山の葉が、彼の心境を物語ってくれたように感じた。落ちて来た葉の先は死んだように枯れていたが、それ以外は対照的に青く瑞々しくて健康的だった。秋を迎えたから徐々に枯れていったのではない、何か他に原因があつての姿だった。季節によるものではなく、樹木そのものに何か問題があるようだった。彼はこの葉と同じように生死のコントラストは際立っているような気分だった。彼は洞窟の中で狂おしい境遇から逃れてきたのか気持ちは病みきっていた

が、一方で陽の光を浴びて気持ちには芯から安堵し澆刺と爽やかな気分だった。

洞窟の近くには石が積まれていた。この石は大昔に山伏か何かがここに野宿をしていた時に積んだものだった。山は宗教だった。世間を離れて、自然の懷に潜り込む。山々は幻想、形而上の体系を、登山をしている者に教えていく。隆起した山のうねりは、大地の脈拍に変わり、山の頂上では動悸している大地の高揚を疑似体験させてくれる。世界の理解がその過程にあり、激しい瞑想の果てに、一滴の雫のような気づきを与えてくれる。澄んだ心を隠喩している頂から湧いた岩清水が下流から海へと流れる軌跡は、樹木のように整然と生への理解を論じていた。そんな世界にいて、自然が許さない、故意でしかなし得ない、この石の上に石を積むという人為的な行為が罪深い自然への裏切りに思えた。積み石は自然の美しさを感じながら、自然とは同化することなどできず、むしろ殺めてしまう罪深さの象徴のようだった。人しかないうる罪深さを、積み石は現実化させ、ただ祈るようにそこにあった。

山の中に一人いる景色は、いつの時代も変わらない。人の気配はなく、自分と自然の関係があるのみだった。山の中はあまりに太古からの普遍的な姿であるが故に、

人など立ち入らなければ、時間など定義する必要はないので、ただ果てまでつづく直線のような時系列を失っている。今ここにいる瞬間が原始時代であろうと現代であろうと、比較する文明はないのだから同じことだった。もう言葉すらいらず、何もいらない。もう何もかも捨て去つていいと思えた。彼は木のように裸になりたかった。自然そのものが彼自身になり、心は氣化して、辺りの空氣と同化することを願った。

耳が冴える。聴覚で知覚する空間は半球形をなしている。地平と空がなす半球形を耳で知覚している。彼の鼓膜にすべてが集約され、彼は音の終点になっていた。世界の果てが耳にあるようだった。耳を澄ますほど、風は轟々と低音を鳴らし、それに反して木の葉のせせらぎは麗しい。ただその音を聞いて彼が感じているのは沈黙そのものだった。時を失つて静止し、瞬間と均衡しているように彼は感じた。自然の躍動する生を聞き入るほどに、心の純粹さは増していったが、その瞬間はすぐに途絶えて、自然の中で彼は異端の存在として取り残された。時の経過を語る自然の複雑な造形の中で、彼は幾何学体のようにじっとしたのだった。自然の中に身を置く事で、自身の中にある、自然には存在のしない何かを感じていた。それは時の

移ろいのまったただ中を感じさせる木の肌が持った曲線や複雑な年輪の形ではなく、ミニマリステイックで直線ばかりの幾何学だった。その数学的な思考の単純な第一段階として、先ほど見入った積み石があるように思えた。彼は世界の秘密の目撃者になったような気分だった。

陽が落ち始めていることを風の冷たさが知らせた。灯りすら持つていない彼にとつては、陽が落ちて真つ暗になつてしまえば、昼のように自然とこのような密事ではできない。影達は伸びて世界を暗闇の中に飲み込もうとしていた。山で夜になつてしまえば、彼は盲人と変わらない。暗闇の中で気配だけで知覚しなければならなさと想像するほどに、周囲は何が起くるか分からない虚空に変わっていくようだった。自分を守ってくれる光と住処がある場所に行かねばならない。光と住処はまさに魂が安住する場所で、それを求めて有象無象な自然の中を駆け抜けた。恐怖が彼を急ぎ立てる。暗幕のようになった夜が落ちきる前に抜け出さなければならぬ。お前は自然の一部ではないのだから共に過ごすことはできないと、山は彼を無言で追いつめ始めていた。

暗くなった時には山の端に身を潜めていた。遠くで灯籠のように光る自宅の灯り

を追憶の眼差しで眺めていた。電灯の光にはそこで過ごした安住の日々の記憶が宿っているようで懐かしかった。家々の電灯は夜の暗闇の中で深海生物が発する光のようだった。海の底になり液状化した夜の深さは、彼の意識の深さそのもののようで気持ちは静かに深く沈んでいた。光のない山の中で過ごす恐ろしさと比べて、光のある暗闇はなんて気持ちがいいのだろうか。電灯の光は恐怖を克服させて夢だけを残し幻想的で、星や宝石のように潤み輝いていた。鈴虫が鳴いている声は穏やかで美しく狂おしい。その音は気が病んでいるほど、優しく夢の中に誘ってくれるようだった。世界は元々彼にとっては夢のような幻想で、こうやって現実の中にあることこそが初めてのようないきなりだった。

彼は家に戻って、家の中には戻らずそのまま車に乗りこんだ。夜の中を潜る潜水艇に乗りこんだようだった。あたりに人の気配はなく、ライトで映された木々は光に正体を暴かれた犯罪者のように照らされた。村を出ると山道に入り、人の気配はさらになくなる。山道を蛇行していると、方角の感覚はなくなり、出口のないどこかに迷い込んだようだった。ただ迷う程、冷静さも冴えて行き、二つの思いが均衡した瞬間は、緊張した弦を震わせるヴァイオリンの高音のような神経質な美しさを

彼は感じていた。

車は高速道路へ入った。速度を増すごとに浮力を感じる。真つ暗闇の中で、規則正しく並んだ街灯は光の道のように、そこを走り抜いて時間を征服する喜びは近未来的だった。車は時間の管を走り抜け、道路を駆け抜ける音は俊敏に響いている。もし、長い距離を徒歩で移動しようと思えば、その間にどれだけの労力や情景があり、太陽と月はどれだけの間、空を撫でるだろうか。距離を速度で征服していると瞬間の中に長閑な時間が圧縮され、目まぐるしく過ぎ去っていった。

車は次第に都心に近づいていった。山間から星雲のようにひしめいている街の光が見えた。ぼつりとある村の電気に比べると街の光はスケールが違い、その輝きの中に街そのものが持つている大きな夢が宿っているようだった。街に近づく程にどんどん暗闇は無くなっていった。彼が山の中に感じたあの暗闇に抱いた恐怖など、街は電気の光で殆んど消し去っている。高速道路を下りて街の中を行くと、景色の中に自然が持っている複雑な曲線はなくなり、人工的な直線や単純な曲線を持った幾何学的な景色に変わっていく。そこには恐怖はなく、安心があった。アスファルトの黒色やそこかしこにあるセメントの灰色は、自然のように澁刺とした生氣はな

く、死んだように落ち着いていたが、安堵して眠る死者のような優しさがあった。ほとんど石化している街は冷たいが心地が良く、街は星雲のように輝き宇宙に在るように沈黙している。

歓楽街に近づくとき光はさらに溢れ色彩が増していった。ビルの陰気な灰色を忘れさせるように、ネオンの光は彼を惹き付けた。車から下りて歓楽街を歩いていると、人の群れの中で彼はすっかりと自分のことなど忘れてしまい、過ぎ去る数々の人や景色、そしてネオンの光に心を奪われていた。様々な色のネオンの光は花のように街を飾っていた。歓楽街そのものが、リアルな現実を忘れさせる夢になっており、電気の光がそれを生み出しているように思えたのだった。

ネオンの光の当たらないビルの隙間の小路はひと際暗い。そこに入ると古い雑居ビルの中に“ONE ROOM”という店があった。店の中は白く塗られた壁や天井が、洞窟のように滑らかに隆起している。店の中は白いカウンターや椅子とテーブルがあるだけで、シンプルだった。カウンターの奥には全身を白で統一した黒人の店員がいた。彼が来ても店員は顔を彼の方へ向けることなく、首をあらぬ方向ばかりに回している。店員は目が見えない盲人だった。彼がカウンターにつくと、点字のメ

ニューが渡された。

この店員は自作の詩などを店内の至るところに点字で描いていて、異様なミニマリズムを感じさせた。店員にとつては言葉に敷き詰められた情報量の多い部屋なのだろうが、点字の分らない人間にとつては、単なる白い部屋だった。以前、店員が詩を書いている時に居合わせた時は、壁を気持ち良さそうに艶やかに撫でては、自身の詩情に感じ入り、その動きはモダンなダンスのように奇異で滑らかだった。店員にとつては、言葉は彫刻のように触れるものでありリズムだった。店員は自分の詩で出来た文字空間にいるようなもので、それはまるで目の見える人間が本の中に入りこんでしまったような感覚に近かった。目の見える彼にとつては文字空間に入り込むことは空想でしかないが、盲人の店員には現実になりうるのだった。店員は気持ち良さそうにいつも笑っている。その姿は、アイマスク型のモニターでヴァーチャルリアリティーの世界に入り込んでいる人間が笑っている姿に似ていた。壁の点字の不連続はあたかも0と1が並んだプログラムのようにデジタルに見えた。

彼はメニューのいくつかの点字をなぞり店員に注文した。彼は文字ではなく、点字の感触が良かったものを頼んだ。その酒がどんなリキュールを使っており、どん

な由縁があるかなどは知る由もない。彼は文字ではわからないことを愉しんでいた。自分が言葉によつて如何に多くのことを認識しているかを忘れ、文字によつて隠されてしまった感覚に気づく。別に文字がなくなるとも、他の感覚を頼りにカクテルぐらい注文できるのでだ。普段自然と抑圧してしまっている感覚が解放されたようで、アルコールがさらにその緊張を緩ませた。

「お久しぶりです。今日も山から車で来られたのですが。」店員は彼が一言も喋っていないのに、彼だと分かっていた。店員は音や匂いをヒントに相手を知る。だから、店内で流れる音楽の音量はとても小さいし、お香など匂いの強いものはなかった。この店にいと彼自身の聴覚や嗅覚も普段より冴えたようで、グラスの音や自分の息の音、カクテルの香りははっきりと感じられた。店内に流れる音楽は壁紙のように空間だけを規定するミニマルな電子音が流れている。その音量は小さく、彼や店員がだす微かな物音ははっきりと聞き取れ、その音も音楽の一部のように聞こえた。店員に向かつて、「そうです。」と彼は応えたが、それはただ返事をしただけとは思えず、[・]「そうです。」という肯定の意味だけが感じられ、音楽の展開の一部のように詩的に響いた。

「街と比べると自然はとても複雑です。」店員はカウンターに置いているシダ系の観葉植物を撫でながら言った。「点字はとてもシンブルに私に情報を伝えてくれますが、こうして植物を撫でると情報量がとても多く、結局何もわからないままに形の美しさに圧倒されます。」そして店員は、次に平なカウンターの机を撫でた。「人工のものは、私にとっては理解がし易いです。だから私は街の中でしか暮らせません。街はとても幾何学的にできているため、この道を進めばあそこに辿り着くんだと、図形のように想像をしながら道を歩く事ができます。昔、人に連れられて広い草原や森を歩いたことがあります。その時は自分がどこを歩いているのか分からず、世界は謎めいていました。まるで混沌とした虚空の中を彷徨っているような思いました。しかし、私は不思議な事にその状況に魅了されていたのです。」彼はにこやかに笑った。

「自然は、わからないことが心地よく、ずっと判断を留保させてくれる気がします。」そして彼は続けた。「今時は電波に乗って世界中で起こっていることが、まるで窓から眺めるように見られます。ただ田舎では都会と違って本物の窓から自然が眺められるのが何より嬉しいですね。」彼は腑抜けて夢遊するように言い始めた。「電

波が空間の隔たりをなくして、遠く離れた外国人ですら、すっかりと隣近所の人のように触れ合うことが出来る様になりました。プライバシーもなくなつて、皆の周りで起こっている事を共有し、すっかり世界中の人々が電気で繋がつて、一人一人が神経の末端となつて世界の肌になつています。その肌に触れる自然が窓から目の前に見えるというのは贅沢なことだとは思いますがね。」

「自然に直に触れる人が肌なら、街の中にいる人は臓器機関の中にいるみたいですね。」店員は笑いながら手をあらぬ方向にゆつくりと動かした。自分の姿が見えない店員は、人が笑つた時の動作など見た事もないので、その笑う身振りは独特だったか、不思議な魅力を秘めていた。「街は浄水場から水を飲み込み、水道管を経てその体内を巡り、下水で排泄をしているようです。神経は道路になつて広がり、都心部は自律神経とでも言いましょうか。街のあらゆる場所が仄暗い巨人の身体器官になつています。電気による通信は脳波になつて、我々に何かを即しますが、神経の末端である私にはその巨人が何をしようとしているのかわかりません。」

彼は植木を眺めながらいった。「電信、ラジオ、テレビ、インターネットと、電気の光によつて世界がつながり、巨人が巨人を飲み込んで、今やもう一人きりで

よ。住処の地球を自らで枯らさないように気をつかいながら、星空の向こうを夢見て……」彼は植木と同じように沈黙して言葉を終えた。

「私は生まれてこのかた、この植木の生命を育む光というものを見た事がありません。」店員はやはり笑顔だった。「私は暗闇というものが何なのかも分かりません。光と暗闇の区別がつかず、私にとって世界は私の感覚そのもので成り立っています。ただ、私にも心の中に光が明滅しているように感じる時があります。恐怖は暗闇のように私を襲いますが、光は希望となつて姿を現わすこともあります。感覚こそがすべての私にとっては、それは光そのもので心の内側から私を照らしてくれます。電気の光は目でみえるそうですね。この電気の光が私の見ている内なる光と似ているように思えてなりません。両者とも人の力で人を照らしています。」

彼は部屋の蛍光灯に見入った。部屋の明るさは、白く瞬くフラッシュの光がそのまま静止しているようだった。「皆、テレビやパソコンの画面を見えますが、その画面が消えた黒いディスプレイが、盲目なあなたの世界に近かったりするのですかね。ディスプレイの黒さは、あらゆる光を見せることができる泉であり、その深さは虚空のように果てしないです。光になつて映し出されているものは見る人を魅

了しますが、単なる想像で頭に思い描く光景のようで、実体はなく儂いイメージでしかありません。私はディスプレイで光の映像を見ることが、想像力を視覚可能にしていることのように思えてなりません。ディスプレイの映像は、私たちが目を閉じて瞑想しているのと変わらないように思います。」

「精神の光に麻痺することはとても気持ちがいい。」店員は体をしなやかにくねらせながら、手を叩いて笑いながら言った。「内なる光は麻酔のように痛みを感じさせません。暗闇の恐怖に萎縮しても、この光さえ感じればたちまち体は弛緩して快楽に身を委ねられます。光が見せる感動や驚きに麻痺するのです。私は薬物中毒者のように暗闇の奈落に落ちては、現れて来る光の快楽を接種し続けてきました。その快楽は深く落ちて行けば行く程に、現れて来て、光の照度は増していきます。その反復を繰り返し、間隔はどんどん短くなっていきました。短くなりすぎて、今は光と暗闇の区別というのが分からなくなっているほどです。ただ今は余裕があると思っているから、こんな風に思うかもしれません。すぐにでも、理性を失うほどの暗闇がやってくるかもしれませんが、そこからまた光を見つきたいですね。私はすっかり内なる光の中毒になってしまいました。」

彼は笑った。「電気の光を帯びてディスプレイに浮かびあがるのは、頭に思い浮かんだイメージそのものです。電気の光は、果てのない意識の暗闇の中を照らしません。意識の中に入り込むと、現実の外側でしかなく、もはや我が身ですら石ころになつたような気分ですよ。」

店員は顔覆っている。「私の中にある光はとても白い。私は白という色を見た事がありませんが、聞いた限りでは白ではないかと思うのです。私には暗闇とその白い光しかなく、いわゆるモノクロというものでしょうか。それが心に合わせて明滅を繰り返しています。白い光が私の内側にしかないというなら、さながら暗闇は外側とも言える現実のように思えます。電気を帯びた光がディスプレイに世界を映し出すというのは、私の内なる白い光のようなものが光源になつているように思えます。なにせ私にとつてはこの内なる光こそが、世界への意識そのものだからです。そして、私にとつてはこの内なる光は、あなた方が見ているようなイメージとして現れているのではなく、私が視覚以外によつて学んだ感覚の象徴です。キーボードやスマートフォンを通してあなた方が光に触れるのは、どうも私が内なる白い光を触感で知ることに通じている気がしています。」

彼は言った。「内なる光は視覚だけでなく、感覚すべてを通した経験が生んだものなので、目が見えなくとも関係ないのではないでしょう。確かにどんな機械によつて、ディスプレイの光の中に身体的に入り込み始めています。」彼は自分のスマートフォンを撫でた。「ネットワークによつて誰しもが個人的に持つていたはずの内なる光を、互いに触れ合わせ混ざり合い始めました。その光に入りこみ始めている私たちはその中で水のように溶けて四角いプールにでも飛び込んだみたいに、深く沈み電子の水中を泳いでいます。内なる光が個人の中にだけあるものならば、ただの夢のようなのですが、その中で人とのふれ合いがあると、もう一つ違う現実が生まれ、自然体系をつくっていると感じる時があります。」

「溶け合つて行く光。もう太陽の光はすべてではなくて、一人一人が星のような輝きを持っています。太陽だけが輝いているのではないと思うのは過信でしょう。少なくともこの電気の光の中の世界では皆が発光している。」店員はゆらゆらとせずにつきり毅然と静止して言った。「電気の中にある自然体系の世界では、当事者が世界の中心であり、それ以外は仮想です。この世界のあり方は、現代では当たり前の太陽が中心である地動説ではなく、地球を起点にした天動説の世界のよう

す。電気が作り出した仮想現実の中で感覚は地動説以前の世界感覚に戻っているんじゃないかと思う時すらあります。」

彼は店の植木を見つめ直した。昼間に山の中で感じた古代感覚と、話題となった電気が作り出す仮想世界の古代感覚に共通するものはなんなのか。現実の自然は単なるイメージのように幻想的で、反対に自然のように変態していく電気の光が産んだ仮想世界は現実の自然のように複雑に思えた。現実と仮想を思考が行き交う程に、両者の境は曖昧になり溶け合って行く感じがした。

夜風にあたろうと思ひ店をでることにした。店を出る扉は、枠が額縁になっていて、扉自体は白紙のキャンパスのように真っ白だった。扉を開いて出て行くのは、白紙の絵画の中に入りこんでいくようだった。

外の通りは相変わらずだったが、煌めいている電気の光の幻想さは増したように思えた。雑多に光っている光は密林のようで、魅惑に溢れる暗闇に迷い込む。様々な色が混ざり合い、その光に照らされて歩く人々はSの舞台になった近未来の下町にいて、生活に汚れていたが妖気のある蛍光色の光が人々を別の次元に

誘っているようだった。今の彼には見飽きる程みている建物や人々はさして意識されず、光だけが際立つ世界の中を歩んでいるが、ネオンの光の一方で、飾られていないビルの裸のコンクリート部分が汚れた肌をさらけ出し、夢への怨念すらも失ったとも言うように朽ち果てていた。

道の先にある光の奥にいる女の横顔に彼は惹き寄せられた。遠くにいても、彼女の魅力をはつきりと彼は感じ、すぐ側にでもいるように胸は動悸していた。いつか見た夢で見た事があるかのような既知感を感じる一方で、初めての驚きだった。突如として訪れた恋心にはっとしている彼に気づいたのか、彼女は後ろを振り返り彼を見ると、彼女も驚きの表情をしている。ただ、彼女の驚きは彼が彼女に抱いた異性への魅力ではなく、横に連れている彼女の恋人と身なりも顔も全く同じ人間を見たからだった。彼と彼女の恋人の姿は全く同じで、ドッペルゲンガーを見てしまったと彼女は驚いていのだった。彼もすぐに彼女の横にいる男が、自分と同じ後ろ姿をしていることに気付き目を見張った。彼女ともう一人の自分は道の角をまがり視界から消えた。すぐさま走って追おうとしたが、曲がり角を最後に姿を見る事はできなかった。

一抹の倒錯した瞬間を後に、彼は腑抜けていた。身を焦がすような愛しさと、自分自身の狂気じみた分裂に感覚は麻痺していた。彼女の側にいたもう一人の自分に嫉妬し、また、もう一人の自分がいたというおかしい事実は、自分を他人以上に他人にさせた。もう一人の自分は彼の願望そのものになったようで、彼自身には失意だけが残っていた。遠目から彼を見た彼女にとっては自分こそがドッペルゲンガーであり、単なる狂気なのだ。身も凍るような疎外感に冷やされ、もしかしたら本当に自分もそうなのかもしれないと思う。死んだように冷たいアスファルトの黒色を冥府への道に変えて、そのまま夜の暗闇に溶けてしまった方が、幾分楽になっていただろうと思い嘆いた。電灯の光は鬼火となって、現実の感覚を失った彼を照らしていた。

現実には透けたような感覚になると、目の前の景色もその存在を失ったようになっていた。目に入るものすべてが、単なる角膜に映し出された光であり、実体があるように思えない。精巧なホログラムになった現実の中では、共鳴し合う音の響きが失われて、無声映画の世界のようだった。遠近法における消失点になってしまい彼自身が姿を消したような気分になった。世界は単なる光が円錐状に網膜に集まった結果

になった。空間を知覚する聴覚を忘れ、現実の写真のように平面的になった。生気を失って凍らされた現実の中で、幽霊のように観念そのものになった彼は彼女の思いに憑依したいと、どこかに行ってしまった彼女に思いを馳せていた。

彼の足は気づけば人がいないところを目指していた。街を亡霊のように漂っている彼にとって、人を見れば自分も人であることを思い出してしまう。人の気配がないビル街に一人になることで、周りを気にせず幽体化している自分に落ち着くことができた。人という宿主がいなくなった建物達のように、彼も単なる抜け殻のようになって無感覚になりたかった。この無感覚が周囲の事物と同化し、環境と調和することで彼は平穏を感じた。巨大なホールに一人だけいるような空虚感に包まれていた。圧倒的な多数の人が不在になつて初めて彼の意識と街が和解をする。反対に、大多数の中に一人いた彼は、その集団の中に消え去っているが、彼の意識と街は抗い反発し合つて、互いの境界を際立たせていたことに気づく。街の人ごみの中では意識と現実の境界は分裂しようとしており、この度のドッペルゲンガー現象もそれが原因で誘発しているように思えた。薄暗いビル街の中で、ある街灯の光が月から分裂したように輝いている。

朝になって家に戻り、窓から中を覗くともう一人の彼と彼女が朝食をとっていた。分裂を知る二度目の瞬間に、これはもう氣の迷いや勘違いなどではないのだと悟った。鏡に写っている姿が彼であるのと同じようにこの状況は確かな事実なのだと思った。どちらが夢でどちらが現実なのかはさておき、もう一人の自分は心の拠り所でもある家に住んでいる。彼の方がそこに戻る事ができない彷徨う側だと思った。生活をもう一人の彼が担って、彼自身はもう何の当てもなくなってしまう。そして、彼女と共に現実を過ごすのはもう一人の彼で、彼自身はそこを立ち去るしかなかった。

家を離れて暫くは近くの神社の境内で過ごした。彼はもう一人の自分と直接出会うおうとするべきか迷っていた。境内を囲む老齢な樹木は日溜まりをつくって、静謐さを讀んでいる。自身の狂気もその中で鎮まることを祈りながら、社へ続く石畳のように黙考していた。二人いる彼のうち、どちらが本当か試す事は禁忌に思えた。現実は一人の彼しか認めない。いるかもわからない神様に抱え込んだ凶事の赦しを請って、世界の過ちとなった自分自身に万物と同じように光が射すことを願っていた。境内の中は形而上と現実の関所のようになって、彼はそこで神さまに自分が現

実と狂気のどちら側なのか裁きを求めるのだった。

鳥居の向こうから彼女が神社の境内の中へやってきた。彼女は青空のように爽やかで圧倒的だけれど空虚な印象で、目を惹くというよりは欠点がなく特徴の無さが端正で美しかった。白磁の酒器のように静かに輝かしく、艶かしい色気を薫らせていた。鳥居は半形而上、半現実の入り口となって彼女を招き入れる。

「あなたはそこで何をしているの？」彼女の問いかけは内なる声のように響いた。「わからない。ただここにいますだけ。」彼は自分の存在だけを肯定したが、嘘をついているようだった。そこにいることすら確かとは思えていなかった。「戻らないの？」彼女の問いかけは、形而上の世界から去って現実に戻るべきか聞いているように感じた。「まだ戻らない。」彼は嘘をついた。もう戻る気などないのだ。「どこかに行くの？」どこに行けというのだ。どこへ行っても空虚の果てに消えてしまいうような気がした。消えるどころか、そもそも自分など始めからいないのではないか。宇宙にすらいられない孤独を感じ、自分は思考のように浮かんでは消えて行く概念そのものになったような気がしていた。自分自身が世界の隠喩になって、観念的な一つの秩序でしかなくなった。その時、自分はメタファーになって、あらゆるものの中

に思うように思えた。「なんとなくここにいます。」思いに任せて返事をした。「そう。じゃあ私は行くわ。」彼女はもう一人の彼の元へ去って行く。現実の中で彼女と過ごすのは、もう一人の彼女だった。現実か非現実か、矛盾の中で迷っていた彼自身は非現実の方の側にいるのだと心に決めると、世界も形而上に変わり実体をなくしたように感じた。

世界が単なる光になったようだった。彼は重力により大地を踏み、どんなものでもまだ触ることができるが、それが当たり前ではなく、それこそが矛盾しているのだとすら思えた。世界は精巧なヴァーチャルリアリティーに変わった。自分が仮想になったことで、世界も仮想に成り代わっている。ただし、彼はもう一人の自分と出会う前と何も変わらず、そこに立ち、そこで息をして、ただいつもと同じように生きている。現実は何も変わらず同じ世界なはずだった。ただ、今感じている世界の姿を前はこんな風なのだと気づいていなかったただけなのだった。

木々の葉が風でさらさらと音を立てて、その心地よさが仮想現実になった世界の解像度を上げた。低画質が高画質に変わったような驚きを感じる。世界は無限とも言える膨大で複雑な情報も持っており、彼の感動はそれを光速で処理をする。心の

躍動と世界の情報の処理速度は比例していた。ただ、心は機械のように一定で普遍ではなく、脈のように常に変化するリズムだった。世界は仮想現実のようになったとはいえ、機械的なものではなく、むしろ常に変化する自然そのものが、まだ人の作り出せない完璧な機械に思えるのだった。

彼は再び街に戻りたくなった。完璧な自然に比べると街は不完全で空虚だった。例えるならば、奥に何があるか分からない洞窟のようなのだ。街という自然の中に空いた穴に入り込みたくなった。なにせ、もう故郷に彼の居場所は無くなってしまった。夢とも現実ともわからなくなった自分を街に同化させたかった。自然はあまりに輝かしく、彼をかき消してしまいそうなのだ。光が影を濃くさせるように、自然の完璧な機能美は彼の不完全さや愚かさも際立たせる。夢と現実、光と影、街と自然。相対する二つの項目のどちらにもなりきることができず、彼はただその間を行き交い迷うばかりだった。両者の間を彷徨い変わりゆく自分しかおらず、確たる一つにとどまることはできなかった。

彼は漫ろに街を徘徊していた。昼間の街に夜のような鮮やかさはなく、立ち並ぶ

ビルの外壁は灰色、くすんだ白色や茶色、道路のネズミ色、電線の黒い一線が錯綜している。彼にとつて現実には絵画と変わらずイメージ化されており、街の景色は四角い輪郭が重なり合つてモザイク状をなした抽象絵画のように見えていた。ビルは映像の解像度を極度に落としたモザイクのように整然としている。これがモザイクだつたなら街は何を隠しているのだろうか。何かがあるという予感だけは絶えず、未知なる可能性が彼を歩ませていた。いつ自分が消えてしまうかわからない。彼の気持ちにはメディアの情報が光の速度で世界を網羅するように加速していた。自分が消えてしまう時は、テレビでも消すように一瞬で消えてしまうのではないか。また、自分が消えるということは、テレビを消す程度に何気なく些細な事なのだと感じていた。

彼は街の中心にある公園にやつて来た。周囲は高層ビルに囲まれており、樹々たちは高く茂り、公園に訪れた人々を守っている。山々の自然に囲まれた田舎とは違い、自然は都市の中に埋もれた潜在意識のように街の中心に忽然と現れていた。木陰で人生を休む老婦、樹々を抜けた風と光に消えようとする青年、惑星のようなボールで球遊びをする子供、恋人達はお互いの沈黙に満たされて幸せそうだった。青銅

でできた踊る裸婦像は、異界から誤って現れて彫刻にされてしまったようだった。隆起した牧歌的で長閑な芝生の丘の上に、彼はホログラムでも浮かびあがるのではないかと思った。芝生はウィンドウズの初期画面の印象そのままで、世界は電子で夢を見ているようだった。噴水は高らかに水しぶきを上げて、霧が作り出した七色の虹に大氣中に潜んでいる夢の断片が垣間見えるようだった。水音はホワイトノイズの様に聞こえ、何も放送をしていないテレビの画面のように、夢を見る世界を初期化させている。噴水は夢を見る街の源泉のようだった。

イメージの源泉になったような泉の前にして、彼は仮想化している自分もここから生まれて来たような心地がした。創造の瞬間に立ち会う思いだった。聞き慣れない野鳥の鳴き声が賛美歌を唄っている。自然ではない全自動の湧き水が永続性を感じさせ、創造性が湧き上がっている。暖かい夕暮れ時の黄金色の陽射しは薄い金箔のように景色を飾っていた。植物や動物の始原になる自然の湧き水ではなく、今の仮想化している彼を作り出したのは、この噴水のように人工的なものだと思えた。彼は自分が街に作り出されたホログラムのような気がしていた。電影として現れて、形而上と形而下の境界にいた。肉体とはもう解離してしまっただが、それ故に彼は自

分の事が純粹な觀念になった気がしていた。生物として生きていくことから解放されて自由になる。もう物質である必要もないので、路傍の石ころよりも彼は自由だった。彼は噴水から立ち上がる水蒸気のように、無いようでそこにある気体に近い存在だった。彼は幾度も感じていた心の空虚な姿に、とうとう自分自身もなってしまう。空のように開かれ、風のように剽窃とし、雲のようにそこにいた。再び大地に戻るのであれば、雨になった時だろうかと、寂しく思い詫びていた。そして、大氣の先にある太陽の光は、仮想化してしまった彼の到達点のようで、斜光は光源へつづく階段のようになり、彼を誘ってくれた。

彼と同様に仮想化して見えた街の方が本当の姿に思え、これまで実在として見えていた物質的な街は影のようにただ物の輪郭しか彼はとらえていない。仮想化した彼にとつては、通行人達もシャーマンのように自らに訪れた固有の夢想の中を生きているように思えた。現実はその自由な夢想に生の秩序を与えていたはずだったが、仮想化してしまったであろう彼にとつては、その秩序から解放されていた。また、各個人が持っている固有の夢想という考えも次第に解きほぐれ、仮想化した街の中で、彼はもう他人の夢の中に混ざり合い溶けてしまうのではないかと思う程だった。

電解した彼は水のような性質を帯びて、何にでも混ざり合う。人々の夢の中に混ざって消えてしまいたかった。湧き上がる噴水は塔になってそれを雄弁に讃えてくれた。昼の陽射しに彼は消えそうだった。昼に誤って点灯している街灯の光のようだった。意識は薄くなつて、自然の光にかき消されていく。それは心地が良かった。生に溢れ、前進的で、心は洗われていった。そして、澄んだ青空と日常的な景色の中に彼は居なくなつてしまった。街では何事もなく営みが続いていた。

時は彼が山の中の洞窟を出て倒れていた時より以前。洞窟の中にいた時に遡る。

彼は真つ暗闇の中で縛られて、手足も足枷で止められ自由がきかず、胴体も壁に縛られて座るか寝るかの姿勢がやつととれるぐらいだった。彼は生まれた時からここにいた。自分の息つかいの音と身を冷やす岩のざらついた感触しか知らなかった。彼の背後のプロジェクターから虹色に色づいた光が、背後の天井から正面の壁に写し出されていた。正面には見事に白い石灰岩のなめらかな岩壁がスクリーンの役割

をなしていた。彼の顔は固定されていて、このプロジェクターに写る映像しか見えない。

プロジェクターの映像は真つ暗だったが、まず最初に部屋の天井が映った。ピントも合わずぼんやりとしていたが、次第に焦点があつていく。シャッターのように視界が一瞬黒く閉じて行く。シーツや蒲団に体が擦れる音が洞窟内に鳴り響いた。音も洞窟内に響くように成っている。映像はふつと変わり、窓辺からの朝日が写り、鳥の鳴き声が聞こえていた。この映像はだれかの視覚と音声を写していた。太陽の光は暖かそうで爽やかであったけれど、その映像を見ている彼にとっては、プロジェクターから映し出された光ではない。再び視点が変わると、横に彼女が横たわっている。この映像の主体はもう一人の彼自身の視点だった。ただ、この洞窟の中に拘束されている彼にとっては、それは単なる映像ではないけれど、生まれた時からここにいる彼にとっては、この映像が世界そのものだった。

彼は彼女の顔を見て悶えていた。彼女に触れようとも触れられず、いくら叫んでも声は届かない。映像でもう一人の彼が彼女を抱いている映像を幾度となく見たが、他人のセックスを見ているようであったし、性的に興奮しても手足は拘束されてい

るので、自慰すらすることもできない。彼は視点の主であるもう一人の彼に猛烈に嫉妬をしているのだけれど、彼にはこの視点が、自分ではない誰かであることすら解っていないので、感情の行き場はなく、ただただどうすることもできずに苦しんでいた。縛られている手足を振り解こうにも外れず、もどかしさに怒った叫び声を上げては疲れてぐったりとするのを繰り返した。そして、精魂尽き果てた頃に、また彼女の姿を映像で見ると心は癒されていき、再び恋焦がれて行くのを繰り返していた。

彼にとっては洞窟の中に写る映像こそが世界そのものなので、もう一人の彼が現実にいるとも思っていない。だから、映像に写る世界について、あれこれと考えることが生きているということであり、現実の彼の行いを映像で見て、喜怒哀楽を繰り返すことが人生だった。彼は現実の彼から分裂していて、最も身近な他者として常にもう一人の彼を見張っている。彼はあれこれと思考を巡らせるが、結局は何もできず真つ暗闇の洞窟の中でプロジェクトに映った光だけを見てずっと過ごしている。

映像を写し出している極彩色の光は彼にとっての世界の根源だった。彼にとって

世界は色付いた光だけで出来ており、形という概念すら持っていない。拘束されて何も出来ない自分など、そもそも無いに等しく、プロジェクターに写し出された映像の二次元こそが世界そのものだと思っていた。

彼はヴァーチャルリアリティーの世界を何の疑いもなく信じて生きている。彼にとつての三次元とはプロジェクターから壁に写るまでの光だけであり、プロジェクターから照射される四角錐の形をした極彩色の光には、宗教的ともいえる形而上学的な信仰を抱いており、太陽のように世界の根源を司っていると信じていた。そして、その光を疑うことは背徳であつたし、周囲の暗闇は虚空であり、拘束されている手足は生まれながらに持った罪や業のように当たり前だつた。動こうとすればするほど、不自由さを感じ、それがなんなのかもわからず得体の知れない苦しみにもがいた。

流れる映像の中での日々の景色や日常を、当たり前のように特に特別な感情は抱かずぼんやりとしているばかりだつたが、映像にテレビや本などが流れる時は、主であるもう一人の彼と、映像を見ている彼とは差がなかった。いわゆるメディアと呼ばれる情報の媒介だけは、視覚や聴覚しか必要でなかったからだつた。だから、

彼は視点の主にメディアにふれることばかりを望んでいた。手足は拘束されて自由ではなく、視点や聴覚すら自分の思うままになることが許されていない彼にとって、この瞬間だけがそれから解放されて自由だった。

彼は形があるという事を知らない。触れるということを知っている手足は拘束されているので、機能はしていない。知っている感触といえ、不自由でもどかしい苦しみだけだった。この苦しみだけが彼に本当の世界を教えていたが、彼にはそんなことは分かるはずがない。生まれながらに背負った罪と罰によって苦しい時から救ってくれる時は、メディアの映像に魅入り落ち着いている時だけだった。自分がその世界へ訪れることなど出来やしないと思っており、行ってみたいという願いを夢のように思い描くことすらもなかった。現実の世界に出るなど彼にとつては宇宙の果ての異次元に行きたがるようなものだった。映像に流れる視野以外を自分で歩けるといえるのは、世界の裏側を自由に行き交うことが出来るということで、果てない道への探索だった。ただ、彼は何も知らないわけではなく映像から学びとつてある程度のこととは解っていた。果てまで続く海原を星や風を頼りに進む航海術のように、映像から多くの現実を学び進んで行くための知識も付けていた。

ある時、鎖が外れた。それはあつけない瞬間だった。鎖に繋がれていた洞窟の中では普段は動いてもただ苦しいだけなので、何もせずじっとしていることが賢明であり、それが楽に生きて行くための彼の知恵だった。憔悴していることが正しいのだと思い、無気力になりきっていた。身体も心も倦怠を極め、あらゆる方向をじっと眺め流ようにプロジェクターの映像をどんよりとぼおつと見ていた。憔悴しきっている時の救いは、眠ってただ意識がなくなってくれる時だけで、意識があるだけで彼は疲れきっていた。彼は首輪にある角度で首を傾けると息ができないことを知っていたが、その姿勢で眠りにつこうとしていた。首をずらすのも息をするのも面倒で、ただただ意識を失いたかった。死んでしまうというのも、いいのかもしれないと思うやいなや、身体は痙攣した反動で首輪が取れていた。首輪がとれてすこし動きがとれるようになると、手足の枷も力を入れれば取れてしまった。

彼は初めて自分の後ろ側を見た。ただの岩壁があっただけだったが、彼にとってはその壁が新世界だった。岩壁の上の方からプロジェクターの光が出ている。その壁を超えるとプロジェクターの本体があるのだったが、これが自分の世界の創造主だったことを思えば神秘的に見えた。

そして彼はぎこちない動きでさらに進んで出口を目指した。プロジェクトターのように見える世界は固定されておらず、歩けば目の前の視野は切り替わる。視界に広がっているのは暗闇がほとんどだったが、針穴のように一点だけ光が彼の網膜に入り込んだ。初めて目にした本物の光だった。この光に比べれば、プロジェクトターの映像は影絵のようなものでしかない。光は白色をしていて、それは始まりの色に思えた。眩しすぎて光の白色しか見えない。彼はその光を目指して進んだ。光の出どころは洞窟の出口だった。ぎこちなくも自力で光に向けて歩んだ。初めて身体に光があたり、洞窟の中の世界から消え去って、新たな世界へと進んだ。ただ眺めていただけの夢のような光と彼が一緒になる瞬間だった。

彼は洞窟の中の世界を抜け出して、現実の世界に現れた。そして、前述の通り、本物の自分を見た後に消えてしまった。彼はどこに消えたのか。この話はプラトンの洞窟の比喩になぞらえて自分なりに書き綴った。

プラトン 『国家』第Ⅱ巻より

地下の洞窟に住んでいる人々を想像してみよう。明かりに向かって洞窟の幅いっぱい通路が入口まで達している。人々は、子どもの頃から手足も首も縛られていて動くことができず、ずっと洞窟の奥を見ながら、振り返ることもできない。入口のはるか上方に火が燃えていて、人々をうしろから照らしている。火と人々のあいだに道があり、道に沿って低い壁が作られている。……壁に沿って、いろんな種類の道具、木や石などで作られた人間や動物の像が、壁の上に差し上げられながら運ばれていく。運んでいく人々のなかには、声を出すものもいれば、黙っているものもいる。^{*}

洞窟に住む縛られた人々が見ているのは「実体」の「影」であるが、それを実体だと思い込んでいる。ヴァーチャルリアリティの世界をじっと見続ける人も、ただ「実体」の影を見続けているだけではないだろうか。そして、プラトンは現実そのものもイデアの光が照らした影なのだと語る

POETRY

POETRY

くたびれた可能性の衣服を私に着せたのは
不幸ではなくただの夜だった時に
光る果実が実る故郷で
かわずが川の沈黙を歌い
星の滝が
微風に揺れる雑草に激賞の喝采を送り
鳴りやまないその音が河川に変態し
大地の喉仏を鳴らし
透明な歌声を響かせている
その音と狂騒している鈴虫の不協和音を
擬人化したあいつだ

ホワイトノイズの壁の向こうにある
磁力で私を惹きつける庭に
電気の細道を抜けて
感情の戸を偶然の鍵で開ける
思い出のように音はなく
初めてきたが日常的な景色だった
誰もいない
早朝

Nowhere

今ここにいることと不在
何にも染まっていない白い夢の光
意味だけは実体がない
私の肉体は外部に吸い取られているので
腑抜けた私の心はあなたに憑依する

POETRY

素朴な光に露光して極採色に日焼けする
フィルムでできた肌を持った
アフリカの処女が
固形化して灰でできた男と婚姻し
相反する電極の性質をもつ双子を産み
トルマリンの原石が知る童謡を読み聞かせている
風に吹かれた砂漠の嶺は地平線まで直線を描く
青空はまるでプールの塗装で所々ひび割れている
泉は留まることを知らず宙を踊っている
彼方に見えるスフィンクスは解体工事中だ
双子はアメジストの童謡にも飽きて
太陽を変形させて遊んでいると
呆れかえった両親は人型をした鏡の友人と
世間話をして恐怖を笑っている

山を裂いて流れる小川で
石を抱く山椒魚が孕んだ夢の中
時の速度で液状化した記憶が
日々の常温で蒸発し青空になり
いつも取り残されている大地は
疲れ果てたと叫び花を燃やしていた

世界は山椒魚が魚の頃まで遡り変態して

ひゅっ

と蒼黒の海の中を奥へ奥へと泳いで世界は消えてしまっ
た

スイッチを押すように気がつくと
常闇の世界に現れる深海の夜の街で
太陽を知らない光は
市販の色をしている
ビルの配管たちのカーヴはエロティックだけど見えず
未実現の夢は貯水槽の中で
幾何学的な図形を煩悶する

POETRY

帯電した夢を繋ぐ電柱は枯れている
十字架のかかったショーウィンドウに断罪して貞操を誓
い
2次元の透視図をみれば3次元の透視図を表すことがで
きるのだから

と

ガラスに移る半透明の私は3次元の透視図となり

不在を目撃する今

目を持った独楽は景色が直線にしか見えず
速度で色彩は溶け切ってどの色も平行に流れている
その最中はすべてが抽象的で
どんな静物もたくさんの意味を失い
そこには色と過程だけがある
以上が私にとっての瞬間の輪郭であり
輪郭を規定したこの行以下から
瞬間の輪郭の外部を□□できる権利を得た

POETRY

時が破裂した拍子に
今がチャンスだと
思考する手は無花果の腕を骨折させ
そこから白い血がでる
折った腕になっている無花果のなんとうまいことよ
実の中は女の甘い悲鳴の味がした
少年は柔らかい腕の手を盗み取り貪っている
これは全て雲の布団が見た夢だ

ネジと釘の音楽で慎重に踊ったガラスが
空と同化したビルになっている
カレンダーの骨組みをしたビルの中へ
感情的な無表情で屋上庭園に登る

一面の街が青芝に映したホログラムをみていると
月の頭痛がしてくる
古本になった四季を鞆から出して
交通への理解や方法の詩を詠んでから
景色と視点の円錐状の関係を漏斗にして目薬をさした

月からみた地球も欠けているのだから
と言った医者と言葉がけだるい楕円の影を落としている

ほんとと安心してると鐘の音をした雪が降るのだけれど
サイレンの赤い音で夕焼けになってしまう

宇宙にできれば地球は手よりも小さいとラッパーが言う
宙に浮くことはとても攻撃的で
歓声は重力にさからっている

POETRY

地球が丸いのは一時のことで
星の目をもった私たちは明らかに欠ける

水が手に付着した時は球体をとらない

太陽になったカメラが常に最高の一時を求めている
最初はあるのままであったモノたちは飽きを恐れてバラバラに繋がらう
ばかりになったマグネシウムは永遠に燃え続け
白い光の中で結局虹だけが生きていた
孤独な虹のノスタルジーが故郷を思う

宇宙の黒さを何気なく征服している朝
もろくはかなげな高い塔は遥かさを抜けていた

小説 Monochrome

夜の街灯を見上げると、光は睫毛で溶けて滲んだ閃光を放っている。街灯の光は表情も変えず終わりを悟らせない嘘をついているようにじっとしていた。照らされて明るいというよりは蛍光灯の光で、白くなって目に映っていた彼の家は、光の届かないところが夜の暗さの中に消えそうなほどうつすらと佇んでいる。彼はもの寂しく親しみのある夜の住宅街の油絵を描いていた。夜の街は森の中のような自然への畏怖はなく、むしろ畏怖の念を隠すように自然からかけ離れた直線ばかりで出来たその風景は、シンブルな骨格を簡単に見透かせる単純さが安心を感じさせた。合理性を追い求めたできた景色は、複雑でわかりにくいものを拒み、骨のようにほっそりとしていて儂げだった。描かれている油絵は、写真のようにその景色をそのままに暴露することはされておらず、曖昧で未完成な上に、正確に描写されていない故の人間らしい味わいがあった。直線の美しさから拒まれた線に感情を宿らせて、濡れたように対象の輪郭を滲ませて描かれていた。夜を照らす街灯の光は、悲愴な街の暗さを貫くように白い閃光を放ち、月や星の明かりもかき消している。光が暗

闇をかき消している様は、炎の光というよりも、嵐から生まれた雷の光が静止しているようだった。街灯の光を眺めるとうつすらと浮かぶアメーバ状の虹の残像を残している。キャンパスに描かれている光は、景色を明るく照らすというよりも、眩しさのあまりに目に見える世界を白い空白で塗りつぶしていた。街灯の白い光は現実の何もかもを消し去っているようだった。

夜の中で光に霞んでいる彼が、家を描いている後ろから、彼女は2階の窓に体を任せて見守っていた。過去に彼女が彼を見た瞬間は夕陽が落ちて空を赤く染めていた時で、不思議と今夜の彼はその時の続きを見たようで、夕方から夜になっただけに何年もかかったものだ、と眠たげで夢をみるように思っていた。彼女はすっかり部屋の時計の針の音を忘れ、浮遊しているように浮かぶ街の光の一つ一つが、その元で生活する人の思い出を内包している様に思えた。深海のような夜の暗闇の中を潜り、気分は酩酊と漂っていた。夢のような心地と現実の間を窓に凭れて、思い巡らせていると、すっかりと自分が夢と現実のどちら側にいるのかも忘れそうだった。街灯の光を眺めて、すぐに目を閉じてみえる光の残像は虹色をしていて、

黒色と区別がつかない。催眠効果のある祈祷のようにゆっくりとまばたきをしていると、ついには自分の意識すら忘れて虚空に落ちて死んだように眠ってしまった。

青白い朝を迎え、重たげに彼女は起きた。5時。窓の外をみると何事もなかったように彼はいなくなっている。街は白くよそよそしく冷たい。朝焼けを眺めていると、夜がゆっくりと変態して空をサーモンピンクに染めていった。時間が経って、世界を覆う空が真っ青になる頃には彼女の気持ちもすっかりと覚めた気がしていた。太陽の光は、飛び跳ねた魚のように活き活き澆刺として、アスファルトの隙間から咲いた野草は、夜なんて来ていなかったと風に吹かれ首を振っている。側の道を行く自転車のカラカラとした音が彼方を目指して響き、カーテンは颯爽と揺れて部屋に鋭利な太陽の光を招き入れる。差し込んだ光に貫かれた彼女の体はガラス瓶のように透けたみたいに、自らの肉体を忘れ、気持ち良さはガラス瓶に注がれた水のように体が充溢した。側では風に揺れるカーテンが作る光と影がベットの上で疾駆し戯れている。窓辺の埃は輝き、宙に舞い上がっては煌いた。窓枠は額縁のように外の景色を飾っていて、展示室に似た緊張と静けさが部屋に満ち、何気ない物音

でもはつきり輪郭と存在感があり耳を鋭敏にさせていた。沈黙の中で、彼女は静止して、生きている神秘に感じ入るのだった。

喜びに浸っていると、次第に外ではさらなる神秘に出会えるような気がして、散歩に出ることにした。まだ外にひと気はなく、街は目覚めていない。ジオラマのように静かな無人の街並みを一人で歩いていると、ジオラマの中で遊ぶ子供の人形にでもなったようで、楽しいのだがどこか不感で躁な気分になって街を歩いた。風に吹かれて空に舞い上がる白いビニール袋に目を誘われて見上げた頭上の電線は、重たげに垂れたベールのようになつてうず高く聳える雲の登場を飾っている。空は街を支配するように広大だった。張り巡らされた電線を神経回路にして思考するような通電している街はぼんやりとしていて、アスファルトは硬く堅牢で、景色の色合いは全体的にグレーで曖昧だった。コンクリートの隙間から芽生えている雑草は、空き地など人の手がかかっている所ほど沢山茂つていて、力強く生えつつも、孤独と不精さを帯びて幽々とした気配を醸している。墓地のそばを通ると生けられた花の香りを風が運び、墓の入り口の門扉は風で軋んで叫び声のような音をさせてい

た。親猫が墓石から墓石へと跳ね、子猫は墓の上で安心して眠っている。墓地の隅に生えている松は腕を広げ、折れそうなほどに横に伸びていたので、添え木で補強されていた。松は自分の腕が折れそうな程に厳しく腕を伸ばして、空を抱いていた。

墓を去りその奥へ伸びる坂道を登る。小さな山が切り崩されていて、半分は団地風に家が建てられており、半分は山の面影が残っていた。頂上ではアスファルトの道路から一片して禿げかかった竹林が広がり、落ちた葉が土を隠し、そこにどこから持ち込まれたゴミも投げ出されている。竹林の奥を抜けた麓には旧家があり、画一化して立っているニュータウン風の家々とは違い、家の趣は時の流れを感じさせた。対照的なこの二つのタイプの家の間にある竹林が、両者を断絶させて剽窃と佇んでいる。竹林は旧家の家主も手を入れられておらず鬱蒼と繁り人の気がなく、ニュータウン側から打ち捨てられたゴミもあいまって、両者の家々の忘却の合間で、異様な気配を漂わせているのだった。旧家は脈々と流れる歴史の潮流に浮かび時の流れの中にいるようだったけれど、画一的な現在の家は写真に映った家のように静止した時間にある。彼女は暫し竹林の奥を見入っていたけれど、彼女自身はど

ちらの側というと現在の方において、旧家に感じた時の移ろいは、どこかに吹いている風のようにでしかなく、時間が凍り付いたように静止している現在の街に踵を返すのだった。

再び歩みを進めると、小学校のグラウンドの側を通る。小学校は飾り気のない四階建ての校舎で白い壁をしている。この校舎が立てられたころは、コンクリートで出来た建物なんてこの小学校ぐらいだったろう、四十年前には近代教育の冷たい使者として物々しくやって来た校舎はすっかり老いて、どこか温かく朽ちていた。清潔な白色が風雨で灰色に澱んでいる姿は、春が来ても麗しさなどやってこない、朽ちていくばかりの都市の哀愁を帯びている。彼女が子供のころからそこにあつた中庭の二宮金次郎の像は、体の節々が壊れているにもかかわらず、まだ歩きながら勉学に勤しんでいて、すっかり時とともに壊れてしまった旧来の道徳や倫理の代表者のようだった。どこを見ても小学校の頃の思い出に導かれて現れる小学生時代の彼女は、走馬灯の速さで学校を巡り、それを思う彼女はもぬけの殻となって虚脱して、懐かしい思い出の空虚さに感じ入った。悦を感じていくにつれ、子供の歓喜に

満ちた叫び声、狂ったような幸福が頭の中を反芻するのだった。

小学校を過ぎ去り踏切を渡ると国道沿いになる。道はまだ車もまばらで、まつすぐ伸びた道の先は遠くなるほどに朝の空気で青白くなっている。街はまだ眠っているのだけれど、コンビニだけは煌々と白く光り過ぎている。日中は醜い程に騒々しいこの街の本性はこの静けさではないかと彼女は思っていると、踏切の警報がなり、街の騒々しさを集約させたように轟音を響かせて、列車の音は過ぎ去った。鉄と鉄がぶつかる音は、みずみずしいけれど鈍く重たい。ビルの隙間から少しだけ見えた列車は、速さによって横に伸びただの色彩に変わっていた。

国道を跨いで海の方へ歩いた。国道を跨げば、そこからは埋め立て地が広がっており、過去には海だった場所を歩いた。砂浜だった岸辺は鋭角に広がり、高い堤防が広がっているため目線を塞いで、海は眺めることができない。匂いだけで海を感じ、行き止まった閉塞的な堤防の片隅に、ひっそりと海への入り口の錆びている鉄扉がだらしなく半開きだった。鉄扉を抜けると黒く緑色をした海が横たわっている。

朝日が波間で白銀にゆれて、岸に流れ着いた何かのオイルが虹色を発していた。街の海は荒廃していたけれど、何かしらの詩的な感情を抱かせるといふ限りでは、南国の美しい海と何も変わらないはずなのだが、その美しさの正体はわからず、海はそれを眺める彼女に無言の歌を響かせるように波音を立てた。

家に戻ると朝食をとりながらテレビを見た。色とりどりの画面を見ている時は、頭の中はすっかりと空白だった。ぼうとテレビ番組の内容など気にもせず、目紛しく変わる画面の色の変化にだけ見入っていた。昔は当たり前のように見ていたテレビだけれど、最近はすっかり離れてしまい、興味はないが過去の自分は何がテレビに魅力を感じていたのか、思い出を振り返るように眺めては理由はわからず、とりとめもなく眺めている。テレビは夢のようで、振り返ると印象深いことは断片的に覚えているが、それ以外はすぐに忘れてしまうのだった。すぐにテレビには飽きて、携帯電話をいじり始める。インターネットを徒然としているのは、テレビとは違い、自分と関係のない情報はないので飽きることは少なく、むしろ自分自身の関心事にどんどん近づいて入り込んで行き、自分自身の奥へ奥へと進む。興味から興味へ

とつづく情報の糸は、瞑想に似ていて、自分自身を見つめるための糸状のネットワークが、粘菌状に広がっている。思考を進めるために、手は画面をなで続け、目は一点を凝視して、体は石化する。そして、意識に任せた好奇心が飽きて失せ、行く先を失って途絶えた時に、ふっと画面から体が解放された時、我に帰ると外で鳴いている雀の音が、放心した意識を現実へ連れ戻してくれるように響く。夢と現実の間に入り込むように聞こえたその声は異質に聞こえた。鳥の声が綺麗に聞こえて美しくに残った。という理解を拒絶して、音の輪郭はすべてを否定するようにはつきりとしており、鳥の声とはこんな音だったのかと再認識させる。現実とは自分と同一化しておらず異質であり、その違和感によって当たり前だと思っていた現実を再認識するのだった。電線にとまっている雀達の声は、木々にとまっている時と変わらない声で響いている。世界への違和感とは人が抱くもので、自然の世界には矛盾や間違いはない。漫ろで騒がしい街でも、閑静な森の中でも雀の歌声は変わらない。街も森も区別をしない自然の力は超然と爽やかで普遍性を感じさせていた。彼女の意識は木の枝のように広がり纏まることのない全体に言葉なく伸びて、幹である心は生を祈り鎮座するように静まっていた。ああと彼女が心の喜びに気づいたときには

鳥は飛び去って行った。

彼は日が昇るまでずっと絵を書いて、それから眠りに入った。蒲団に穴が空いていて、雲の切れ端のような羽毛がベットの周りに落ちている。寝間着は薄く、長年親しんできた彼の睡眠を想起させている。目がさめてすぐ携帯を手にとり、ぼんやりと眺めて親指を滑らせながら硬直して、目が覚めてくると起き上がり、床に敷いていた新聞紙を足で踏んだ。彼の部屋は床の全体に描くときの絵の具が散らぬように、床を新聞紙で覆っている。そのため、新聞紙の文字や写真で床は雑多としている。この床が気に入らないときもあつたが、紙面に印刷された嫌いな世間を踏みつけていると思い初めてからは慣れ始め、むしろ雑多な床に飛び散つて混ざり合う絵の具との混沌に見入ることもあつた。昨日の夜に書いていた街の絵は部屋のイーゼルに置いてあつた。窓辺の朝日がアクリル絵の具を眩しく照らしているので彼からは絵の半分しか見えない。部屋は絵の具の香りがして、外から入り込んで来る木々は風に吹かれて雨のような音をさせている。彼の絵は本棚のように納められており、縁には描いたものが見分けられるように印がされていた。昨日書いていた絵の縁に、

深夜・電燈・家」と書いてその棚に収め、また絵を描くために出かける準備を始めた。部屋はこんな調子で殆んど絵と寝るだけのために使っているので、倉庫のような静かさがあつた。部屋のカーテンはいつも閉めないで、窓からの陽射しに部屋の新聞紙は日焼けしている。

次に絵を描きに行つた場所は大学の構内で、この日は日曜のため大学に学生は少ない。端正に手入れされた芝生が広がっている先には大きな窓があり、その先には白衣を着た学生が黙々と研究に勤しんでいた。校舎は薄いグレーでこれといった特徴のある建物ではなく、四角い箱に窓がついているだけのようなシンプルで地味なものだつた。彼の描いている絵には、広がる陽に輝く一面の芝生の隅に、影のように描かれた校舎と窓辺の白衣の学生が描かれていた。活き活きとした芝生はみずみずしいが、きつちりと四角に植栽されている姿は森のような生の躍動がなく神経質な直線で、窓辺の学生の白衣姿とどこか調和している。それを描く彼の筆使いは震える手でどれだけ正確な直線が描けるかどうかに注意を払っており、ゆっくりと慎重に描き、物差しを使うことはせず、使わないことが彼のこだわりでもあつた。時折、

近くを通っていく学生は、なぜこんな場所を描いているのか不思議そうに珍奇なものを見るように彼を眺める。彼はそんな目で見られるのは慣れており、さして気にしてはいないが、実際はその視線を拒むために、頑なに自分の絵の世界に入り込もうとするのだった。芝生は、自閉しようとする校舎の薄暗さを照らすように明るく描かれていた。描いている最中に訪問者のように訪れてくる絵を描く喜びを、自分を戒めてじつと待ちながら絵を描いていた。その訪問者のように訪れる瞬間に理由などなく、ただ描いている時にしか感じるができない。彼はキャンパスの四角形の前で何の答えも見出せないのに、何かを自分自身に對し問いただし気持ちに絞りに出すように描かねばならなかった。訪問者のように突然訪れる喜びの瞬間は、彼に絵をただ描かせることだけを望み、さらにはその行為に意味を見出せない時ほど不思議な喜びをいつそう感じさせた。

彼女は白衣を着て薄暗い廊下をヒールの踵を堂々と響かせながら歩いていた。何の飾りもない四角い筒のような廊下は、何かあるといえば部屋の机や扉程度で、実用性のない物は何も無い。彼女は今日すべき課題を正確にこなすという目的に忠実

でなければならぬと、自分に言い聞かせる。この大学の校舎はそれを強いるように余計な物が無かった。そのためか、反対に窓から見える青空や雲などの自然は雑然として複雑に感じられた。周囲の環境がシンプルであればある程に意識も単純になった。自分自身を道具や機械のようにコントロール出来ることを望んでいる今の彼女の気分には、何の答えも持たない自然は疑問にしかならない気がしていた。数歩毎にある出窓からリズム良く見える芝生は、しつかりと刈られて爽やかに見えて、午前中の太陽の光に輝いている。今の彼女の心情には、手が加えられた単純な姿と複雑な自然の姿の両方を併せ持った、よく刈られた芝生の姿は丁度よかった。彼女はリラックスした気分で廊下を歩き抜け、研究室の扉を開いた。

射し込んでいる光が、薄暗い研究室の窓辺に射し込んでいる。カーテンはきちんとしまりきっておらず、どこか気だるい様子だった。今日はこの研究室には誰もくることはないのです、自室のように落ち着けることができる。さつそく棚から木箱を取り出して、蓋を開けるとそれは蝶の標本箱で、そこには幾種類もの蝶が時を止められたように収まっていた。蝶はモルフォ蝶属のものであり、殆どが翅を輝かせ、

吸い込まれるような光を持っていて、見る角度によって色を変えて煌めかせていた。この光の角度で変化する青色はモルフオ蝶属の特徴であり、鱗粉の層が作り出す構造と言われるもので、この輝きに彼女は魅せられてしまっていた。標本の蝶には生気はないのだが、翅の美しさは死んでも変わっていない。死んで亡骸となる人と比べれば、なんとこの蝶は普遍的な美しさを持っているのだろうと、薄ら寒く美しさにうっとりとしていた。彼女は永続性のある美しい何かを夢見ながら、彷徨うようにこの蝶を案内人として、とりとめのない思いを巡らせる。この蝶の研究をすることは、彼女にとっては、その永続性のある美しい何かの先にあるものの手がかりを掴むためだった。彼女は電子顕微鏡で翅をどんどん拡大していく。鱗粉が瓦状に波打っていて、一枚一枚が光の具合で虹を塗り付けたように輝いている。電子顕微鏡のディスプレイは淡々と翅を拡大していき、美しさをどんどん拡大して微細な姿を映し出してゆく。その様は、翅の美しさを曝露していくようだった。顕微鏡の分解能の上限に達するころには、画面には色彩はなく白黒で、独特の棚状の構造が映し出された。筋を拡大するとそこにはまたさらに筋状となっている。その様は異世界の森にでも彷徨いこんだようで、見たことはない形だけれど強い説得力を

持った形をしているのだった。彼女はモルフォ蝶の翅の美しさの秘密はここにあるのだろうか、不思議そうに眺める。自然の神秘を目の前にして湧き上がる疑問や閃きを待つ。彼女はこの美しさの秘密を暴いて、人工的にこれを作ることを目標に研究に取り組んでいる。それは自然の世界を自分で操りたいと思う悪魔的かつ呪術的な衝動であり、無邪気な子供心に似ていて屈託がなく光のように素朴でもあった。善でもなく悪でもないこの思いは光も影もない冥府のように現実味がなくぼんやりとしている。電子顕微鏡に移された世界はこの奇妙な思いを住まわせていた。うつろう気分はまさに蝶がふらふらと取り止めもなく飛んでいるようだった。

電子顕微鏡の機械音だけが耳に響きわたり、そのかすかな音は心象では拡大されて凄まじい騒音のようだった。モルフォ蝶の標本の近くに、一枚のCDの表面が虹色を光らせて寝そべっている。CDの虹色の光も反射で色合いを変える構造色であり、モルフォ蝶と同じ性質をもっている。CDはレーザーに反射した光によって情報を保存することができる媒体だ。電子顕微鏡でCDを拡大すると、モルフォ蝶のように複雑な構造ではなく点と線が掘られただけのシンプルな物で、夢のように音

や映像がその場にいたかのように再生できるものの姿がこうも単純なものだということに、拍子抜けをする程だった。CDはとても便利なものだが、あらゆる物を保存できるという万能さの裏に、どんなものでもない得体の知れない喪失感と怠惰を彼女は感じていた。ディスプレイの電源を切り、そこに現れた黒い画面にその喪失感は似ていたが、それを感じている彼女自身は無自覚でその事に注意を払いもしなかった。彼女は忙しく部屋の中を眺めて、意識を向ける対象を目で探していた。それはモルフォ蝶の翅の真実が分からない故の意識の逃走であり、単なる飽きでしかないのだけれど、何かに救いを求めるようでもあり、何かより良いものを辿るための批評じみた視線だった。彼女が結局目を向けたのは窓の外だった。自閉するカーテンの隙間から覗く光の先には青空があり、日常的な景色がある。彼女にとつてその瞬間は光の正体でもみたかのように、彼女の心が持つている生の感覚を喜ばせた。この瞬間は、モルフォ蝶の翅やCDが持つている構造色のように、彼女の心が光の照射によって虹色に変化していくような瞬間だった。部屋はカメラの内部のように窓から覗く瞬間の景色を彼女の心に保存させた。窓辺の光に充溢する彼女は、世界を保存する媒体としてそこにいるようだった。構造色のように、彼女の感性は光に

よって変化し彼女の感性と同調した。その変化は太陽の角度が変わって変化していく空の色とも共通している気がする。彼女の気分はさらに空へと果てた。空の果ても彼女の気分も全くの空虚だった。半現実、半空想の中にいるようで、彼女自身は空気のように透明になった心地がした。彼女は姿を失って、部屋の空気に溶けて、辺りの物音や自分の息づかいなどの音に変わったような気分になった。この瞬間の彼女は石化したようにじっとしていた。白く静止した石膏のようになった。彼女は窓の光に露光して辿り着いたこの瞬間は、モルフォ蝶の翅の美しさやCDが光を反射させてデータを保存する仕組みに似て、光を通り抜けたゆえの体験であり、さながら青写真に陽があたって鮮明になった写真のような気分でもあった。世界は静止していた。部屋はカメラのように瞬間を射抜く装置として機能していた。快樂に痙攣したようになつたのを頂点に石化状態は終わりとなつたが、その余韻は次第に光への好奇心へと変化をしていき、彼女の心を構造色の研究へと引き戻し、再び電子顕微鏡を起動させて研究作業に向かわせることとなつた。ディスプレイの光は彼女を朝焼けのように白く照らし、常にスタート地点にいるような異様な爽やかさで照らしていた。その光は陽が落ち始めて部屋全体が薄暗くなり始めても、もちろん

変わらず、むしろ暗くなる程に光を際立たせ、暗闇の中で始まりの光を浴びせ続ける一定の連続性は異様さを増していった。そして、モルフオ蝶の翅を拡大させた世界の仄暗い奥へと、彼女は再び入り込んで研究を続けた。

彼はずっとキャンパスで絵を書き続けていた。太陽の光が落ち始めて空はピンク色にそまり、建物は横たわって休むような長い日陰をつくり、電燈は光り始めた。彼は変わりゆく景色をその時見たままに色を塗っているの、昼間に書いた絵は上に色が塗り重ねられ姿を消し初めていた。絵は塗り重ねられるが、現実の跡形もなくなえて変化していく。彼は夕陽を迎えて無常な思いに浸っていた。夕陽は美しいけれど、色の変化はめまぐるしく彼の筆はついていけずに陽は落ちて行き、黒色で景色を塗り消すところが増えてきていた。切なくも美しい時間帯を迎えてはいるのだけれど、そのスピードに追いつけずに焦りを感じていた。陽がどんどん落ちていくにつれ、黒色が湧くように絵を滲ませ始める。それは冷たく戦慄を呼び起こし、忍び寄る恐ろしさや、一度発生を始めたなら急速に全体を犯し始める病理のようでもあった。ただそれをかき消すように電燈の光る白色が叫ぶように鮮烈に光

始めており、黒色をかき消し、元の色を陽が出ている時以上に照らしている。まだ若干の陽の光が残っている時に、彼は描くのをやめた。やっと描いた絵が現実の景色の変化に追いついたと思つたからだつた。夕陽の美しい時に遅れていた彼の筆は、走るように黒色を描かねば追いつくことは出来なかつた。空はもう蒼黒い。絵を書くのをやめて辺りを見回すと実際の景色が絵の具を帯びただたの色彩に見えて視界が滲んだ。もうほとんど黒色になつていた建物の場所からじわりと何かが渦いたので目を細めて見つめていると人影らしい。電灯の白色に入り込んだ時は人影が黒色からそのままに抜け出したようだった。ずっとキャンパスを見ていた彼の目に人影は絵の中を歩いているように見えた。空にはまだ星も目覚めておらず、月も白さを残している。現実を見ているにもかかわらず絵画を眺める鑑賞人のような心地がし、意識が今の自分自身を俯瞰して観察しているようだった。自分自身の心情が他人じみている。意識は現実からは分離していたようだったのだ。そして、現実と意識の距離が乖離すればするほど、意識は現実の状況を俯瞰して理解し、彼の意識を現実の今の瞬間が代弁しているように感じた。辺りは生気がなく整然として自分自身も無感覚に感じられたが、精神は現実を超えて跳躍したようで、その高揚は初めての

ものであるはずなのにどこか懐かしかった。

彼女は大学を出た。すっかり陽も落ちて、街は電気の光を発散している。街中の電気の灯りは人の寝入った住宅街にポツンと灯籠のように光る窓の灯りとは違い、霧が発光したように眩しく光っていた。駅前が近くなると、人波が駅へ流れ込んでいる。露光時間を長く撮影した写真のように一つの線になつて歩む人々は、無個性な人々が流れていくようで、街中で息吹く集合意識の脈拍に変わつていた。彼女は人並みの中の一人一人が独自の世界を持つていると感じると、過ぎ行く人のそれぞれの時間が次々と錯綜して情報過剰状態になるので、彼女は周囲を無視するように無個性だと認識をして、自分自身の自意識の中に入りこもうとすることでバランスを保つ。その無視は独自に洗練されて、彼女の魅力の一つでもあった。それは彼女の無視は個々人の時間を受け入れているから故の防御方法であつたので、彼女の奥に潜む人への本来の寛容さや包容力を薫らせていたからだつた。彼女の自意識は卵の殻のように脆くその中を守っており、卵の中では未だ生まれない自分の夢がとろりと溶けている。彼女にとっての生の瞬間とは研究室での窓辺の光に受けたよう

な啓示的な一瞬の向こう側であり、言語化を逃れている形而上的な何かだった。それ以外の瞬間は反対に死なのかというとなんな事はなく、集団の中で自分らしさというものが希薄になり、卵のような彼女の自意識は、孵化した自分の姿もわからず、ただ可能性としてあるだけだった。卵は未だ出会うことのない形而上の世界にいる母性に抱かれた安息を夢見ている。太古の占星などペテンだったと隠蔽するように街の灯りは星を隠して、宙を暗闇に塗り替えていた。形而上にある生の瞬間を求める彼女の思考は、遙か空の果ての宙より先にいく事はなく、限らない宙は姿のない壁になって彼女の思いを拒んでいた。彼女は十字架のような交差点で立ち止まった。人々は生きる都市に血管のように張り巡っている道を縦横無尽に行き交い都市を呼吸させている。疾走している車は街を動悸させ、痙攣が起きないように信号機は寡黙に理性を働かせている。祈るように交差点を渡って、地下鉄の階段を下りていくと、独特の風が地上を目指して吹いていた。生暖かく人為的で、地下から出口を求めて吹き上がるその風は虚ろだった。地下墓地のような不気味さは蛍光灯の白い光がかき消していて、構内は賑やかな広告が騒がしいままに凍り付いている。地下鉄の車内に入ると行き場のない暗闇の中を列車の轟音は自由奔放に響き、それを聞い

ていると地下にいる閉塞感を忘れさせた。その音は耳の穴を塞ぐと聞こえるごうごうとした体内の音に似ており、彼女はさながら都市のお腹の中にいる胎児の心持ちだった。

彼は電車の窓から見える、流れ行く景色を描いていた。線路の側には生き生きとした草がしげり、爽やかな青空の中に電車の速度に取り残されたように雲が浮いている。空や雲はじつとしているが、窓から近い草や家々は残像が水平にまっすぐ横に伸び、色彩だけが描かれていてぼんやりとそれとわかるのだった。スピードの中で景色はすっかりと輪郭をなくしている。彼はその瞬間をとらえるために、絵筆やブラシを水平に走らせながら、過ぎ行く景色を描こうとしていた。スピードを帯びた対象は、輪郭を失って、それ自身が持つ現実との即物的な因果関係から解放されていた。その自由は遠い場所を征服して駆け抜けている速度の喜びだった。速度の過程を表現するために輪郭を失わせ線のように描いたり、透明な幽体が離脱するように描く。物質である束縛を離れて平行に流れ行く色彩になっていったそれはもうそれ自身ではない何かでしかなく、一つ一つの対象は意味を失う寸前まで朧な

姿になっている。輪郭を失ってグラデーシオンになったそれは物だけれど物としての重たさを忘れさせていて、形而下と形而上の合間にあるようだった。はつきりとした形になる前のそれは、何かを思い浮かぶ前の衝動によく似ていた。影のような陰気さはなく悲しさに訴えることもない。しかし、とても内向的な余韻があり静けさを裂いているようだった。彼は絵を描き進めるほどに、自分自身も形がなくなっていく気がするほど、ものの輪郭そのものを忘れて行つた。描いている景色のように自身もぼんやりと疾走しており、重たい生を忘れた。風になったようなその瞬間は爽やかさもあつたが、飄々としたそれら恐ろしさも秘めており、描いている最中に彼自身は幽幽としていた。絵の中で密閉されている世界に吹く風になったようだった。

家の最寄り駅に着いたので彼女は電車を下りた。帰宅者の波に押し流されて出口へ向かう足取りは彼女の意思で歩いているように感じられなかった。足音の中で、小間切れに切り刻まれた人の会話が断片的に耳に入り込んで来る。浮遊して耳に漂つて来るその音は捉えどころがなく、正体が不明で、明るくも暗くもない。その

中で電車がホームにやってくる時に鳴る音や、案内のアナウンスは天啓のように高らかに響いていた。女性のアナウンスの声は無感動だけれど綺麗な声で、ありのままの現実を語るこのアナウンスに詩的な要素はないはずだが、それが無い故に毅然と響き清潔で、人間らしさがないので誰も聞いたことのない女神の声を彼女に思わせた。コンクリートで出来た駅の構内は古代ギリシャの神殿とは到底言えないが、町中の多くの人びとが集う祭儀的な威厳があった。誰も祈りなどしていないし、むしろ行き交う人びとは祈りなど振り払うように歩いている。しかし、その信仰のなさを感じれば感じるほどに、現実には拒まれた宗教的な何かが彼女の中で満ちていくのだった。街や人が現実的で均整がとれて合理性を感じる程、それに否定された超現実的な世界の気配を感じた。駅に大きな鏡があり彼女や行き交う人びとが写っていた。彼女は鏡に写った自分を見ると、ありのままの現実を映し出す鏡の冷たさに硬直して無感覚になって、ガラスに写っている世界の中に入り込み、現実と平行している別世界にいるような心地だった。鏡の中の世界では鏡の枠の外や彼女の背中は絶対に見ることはできず存在しない。ただ想像の先だけでしか成り立たない鏡の世界の枠の外や裏側に、漆黒の気配を彼女は感じた。鏡の世界に入り込んだ不思議

の国のアリスが落ちてしまった穴の暗闇のようだった。鏡に写っている歩く人びとは鏡の中に写っている世界から見れば鏡の中へ突如として現れて、突如として消えていく。鏡の中に瞬間的に現れるだけで、鏡の中以外ではどこにいるというのだろうか。倒錯している彼女は鏡の中の世界から現実を覗きこんでいるような心地だった。鏡の世界の外側を現実とは当然のように示しているので、人びとは当たり前のようにただ過ぎ去っていくが、彼女にとつてはあまりにも異様で、現実の世界は鏡の外側の漆黒の世界のようにも思えた。自分が感じている鏡の枠外や裏側にある想像でしかたどり着けない漆黒は、同じように想像でしかその先に辿り着けない無限に続く夜空の黒色にも通じているようだった。彼女はわずかに痙攣をして、その常闇の存在に震えた。そして、鏡の前で白痴のように呆然としていたが、人ごみの中に紛れこみ自分の意思などなく流れるように再び歩き、その場を去った。何も見なかったように去っていくことが、理解のできないことに対する彼女にとつての防御なのだった。駅構内を出ると夜空の闇が広がっている。夜空はあまりにも日常的なのでそれがなんなのか疑うことを忘れていた。想像でしか辿り着けない鏡の枠の外や裏側の虚無と夜空は今の彼女にとっては果てしが居ないという点で同じものである。

るが、夜空には決定的に違うものがあつた。月と星が永遠に広がる混沌とした漆黒に調和をもたらしているのだつた。

写真 は 現実の光と一致しているが、絵画の方が彼の感じたことしか描かないので写真より個人的なものだ。彼は対象の姿を無感覚なただの写真のように眺め、彼の感覚を通り抜けた現実が色彩や輪郭を変えてキャンパスに描かれる。現実そのものをそのまま写生しようとしている時もあるけれど、そんな時は速度によつて變形した絵を好んで描いた。動きのあるものに描かれる速度に流れる色彩の川は、現実を見る彼の目が捉えた輪郭がなく色彩だけになつた対象だつた。彼の中を通り抜けて變化した現実も、速度によつて色彩だけになつた現実も、本来の形を失つていくという点では共通していた。彼が何かを感じる瞬間と同様に、速度の中にいる時も、現実の色や形を變化させる力がある。彼自身の感覚が過剰になつたり、速度が加速すると色や形を失つてますます變化していく現実 は、ひいては變化するどころか風のように無くなつていくように感じられた。そんな時は全てがさつたような空虚だけを感じていて、彼のいる空間は彼を肯定し満ちたしていた。そして、氣化してしまつ

た詩的な心は氣候となつて変化していった。気圧と気温で絢爛と編集された空虚は、晴れや雨、春夏秋冬として彼の感性と一体化するようだった。そして最後には空虚であることすらも意味を失つて、空虚すらもない白いキャンパスと向かい合った。彼は光を分解した虹のように色が別れた絵の具を再構築させて、彼の目に映った物を描く。彼の目に入り込んだ光を、絵の具で描いてキャンパスに光を実現させた。彼にとつては光は希望の象徴であり、絵を描くことは、希望そのものの描いているのと何も変わらなかった。

家に戻った彼女の部屋で、夜は窓枠に仕切られて四角形になっていた。絵画とさして変わらない姿だったが、もちろんそれは現実であり、光が彼女の角膜に映り込んだ結果だった。窓枠の外側にも当然に世界は広がっている。部屋の鏡は違う。鏡は目のように光を捉えるが、それをありのまま表面に映すだけであつて、駅で迷い込んだ鏡の枠の外や裏側にある漆黒の世界には何も無い。窓枠に仕切られた夜の視界に入らない枠外の部分は、当然に現実の世界が広がっているが、鏡においては、鏡の枠内にだけ世界は映りこむことを許されていて、枠外など存在するはずも

ない。では、合わせ鏡をした時の反芻する世界のずっと奥にある黒色はどうだろうか。その黒色こそが彼女が駆で感じた鏡の枠外や裏側の漆黒と同じに思えてならなかった。それは無限に続いていく暗闇であり、奥の果てなどは知り得ない。夜空の果ての宇宙の黒色も向こう側が無限に続いているので、この黒色の向こうとさして変わらないはずなのだが、全く違う。鏡の中でしか成り立たないその暗闇は宇宙のように実在する無限ではなく、実在など全くありえず星などもちろんない純粹な暗闇だった。視覚でしかその奥は覗くことはできず、想像でしかその奥の深さはわからないことを知るのだった。鏡にうつる世界は現実でありつつも実体はないフィクションで、その暗闇の世界が生んだようだった。世界を映しつつも、実体を持たないという点では、ありとあらゆるものを映すパソコンやテレビの画面に電源が入っていない時の黒色にも共通している。常闇は普遍的に暗い領域を物語るように、希望の光のような生の予感はなく、静止している。鏡の中にあるイメージは純粹な光でしかなく、物質としての束縛から解放されている。それを眺める彼女は無思考で空虚だった。同じように実体を持たない彼女の思考が同期して、鏡に映っている景色が彼女の思考の代替えとなった。彼女の頭に浮かんでくる思考は言葉にもイメージ

ジにもならないような曖昧さがあるが、鏡にうつる明晰なイメージは、すんなりとそれと取って変わり、彼女を明鏡止水に似た境地へ連れて行った。思考の代わりに彼女の空虚な頭に入り込んだ仮想現実とは、次第に鏡と同化を免れた彼女自身の思考の存在も明確にしていき、言語化もイメージ化も出来ない謎めいた何かの領域を予感させ、それが何なのか手がかりを求めるように、さらに深く鏡に映る自分の顔を覗き込ませた。彼女は驚愕して、目を見開く。あまりにも自身の顔は正体が不明に見えた。その顔は得体が知れたものではなかった。言葉にもイメージにもならない何らかの領域について、自分の顔には何ら手がかりもなく、形ある確かな謎としてそこにあるだけだった。

彼は自画像に取り掛かった。白壁を背景にして何度も自分の顔を見た。表情は喜怒哀楽のどれにも当てはまらず、蝋燭の火をじつと眺めるような平然とした表情だった。写真のように現実を忠実に描いた。自分らしさを排除するために、非現実的な彩色や描き方を避け、鏡に映るように客観的になるように努めた。何度も同じところに絵の具を重ねて描いて、他人が見て写真と同じように見えても、描いてい

る彼自身は現実と同じようには描けていないとわかる。アキレスと亀のように、マイペースに進む現実を追いついて描ききれたと思った瞬間に、ありのままの現実など捉えられていないこと気づき、再び現実を追いかけるために描くことを繰り返すのだった。絵などにせず写真を撮れば確かな現実を捉えることが出来るにも関わらず絵にするのは、実体のない思考を抽出するための手段として絵を描いているのであって、写真を撮ってしまえばそれは単なる現実でしかなく、彼の思考は何も語っていない。語らないどころか、彼自身が描いた現実に比べれば写真にうつる現実が完璧で、その差に自分の未熟さを感じ、自分すらわからない秘密を暴露されているように感じるのだった。

彼は絵を描くことで思考を限りなく現実近づけて、草や木や石のように単なる物体に、自分自身が近付くことを目指した。それは自我が彼の中から出られないがごとく、彼自身の内側に閉じ込められているため、単なる物になることで、自分自身という殻から思考を解放させ、現実と同化をはかる為だった。鏡は自分の目の前ある姿を映しているのだから、彼自身も鏡のようになりたいと思うほど、彼の心も

鏡のように凍てつき冷たくなった。現実と同化しない彼の思考は現実には拒否されて恐ろしく孤独になる。彼の思考は未だに現実とは決別しており、思考は幽体化している。そのゴーストは光となつて絵画になる事が出来ず、瞼を閉じた暗闇の檻にいる。身体化されて絵画に現在として現れる事が出来なかつた過去や未来は常闇のなかで混ざり合い、必然とも偶然とも思えないまどろみ混沌とした自意識になつていた。この自意識は常に狂い上がっており、整然とした現実には現れてでることが出来ず暗闇の中で矛盾を蠢かせた。

絵としてキャンパスに現実の姿を現せさせるために集中力を筆先の一点に宿らせ、暗いトンネルを抜けた後の瞬間のように対象を捉えて現実を描こうとする。このように彼にとつて現在化は暗闇の出口のように光となつて現れるが、自意識の暗闇の入口はどこにあるのかわからない常闇だった。その暗闇は母親の子宮の暗闇のように奥が深く果てがない。しかし、現実として現れていない姿なき思考は確かにそこにあつた。その暗闇は現実には阻まれるように際限なく広がっている。彼の視界が鏡のように現実を捉えるなら、思考している際限のない暗闇は、彼女が感じていた

鏡に映る世界において枠の外側や裏側にある暗闇だった。現実を忠実に描こうと思えば思うほど、その暗闇の存在は彼の中で色濃くなっていった。彼も彼女が感じている暗闇の存在を意識し始めていた。

彼女はまた一人、研究室でCDに向かい合った。CDの虹色は光が溶解され七色に分かれていて、光を記憶する源泉のように波紋を描いて光を留めていた。PCを起動させ、データを開けばこのディスクからは光によって様々な世界がディスプレイに現れる。ディスクは電子顕微鏡で拡大すると単調に様々な長さの線で出来た突起が掘られている。そこに光を当てて反射の有無で、ディスプレイに変幻自在の極彩色で際限できる世界が現れる仕組みなのだけれど、それは余りにも単純であつけないながらも、瞬きしている目をじっと眺めるような催眠的で規則的な陶酔が潜んでいる予感がした。眠りに落ちて夢を見ているような幻想をディスクは保存して、二次元のディスプレイに映すことが出来る。

彼女はディスプレイをじっと眺めて長時間作業をしていると、彼女の目の前の景

色は目の角膜が光を受けて認識をもちろんしているのだが、視覚に忠実になるに従ってデイスプレイの外も三次元にはなく、二次元に思えた。何せ、彼女の角膜に入り込んでくるものすべて光の陰陽の差による色調を捉えているのであって、奥行きがあると知覚出来るのは目以外の五感や体験がそうさせているのだ。じつと自らの視覚にはまり込んだ彼女はデイスプレイの中だけではなく、現実すらも二次元となり実体を失っていく心地がした。夢のようになった現実とその裏に潜んでいる漆黒の虚空の気配は、デイスクの中に記録された光と何も映していないデイスプレイの黒色の関係に同調している。駅の鏡や昨晩の自分の部屋での合わせ鏡の奥にあった漆黒の世界の体験が再び訪れていた。

イメージになつて実存を失った現実を眺めていると、彼女の意識こそ世界の源泉であるかのように意識が現実を生み出しているようだった。眠りについて見る夢は矛盾だらけの混沌としたイメージのカオスだが、それが現実において整然として全く狂いなく成り立っているように今を感じていた。モルフォ蝶がとまった瞬間に似て現実も一瞬静止する。ふらふらと彷徨っていた彼女の意識は嘘のように現在の瞬

間に留まった。現在は奇跡的なバランスで成り立っている。ふとしたらまたモルフォ蝶は羽ばたいてアンバランスに混沌へと飛んでいってしまうような過敏な瞬間だった。自失して自分自身の存在も夢のように実体を失ってピタリ静止したと思った瞬間の後、飛び立った蝶のようにその瞬間は終わった。

彼は絵を描いている時に目の角膜で捉えた対象を描く為にキャンパスの白色に色彩を塗る。フィルムのような役割をした角膜に焼きつく光は、目を閉じている時は真っ暗闇だ。視覚に忠実なのは、絵画よりもカメラであったりディスプレイの方であり、それは閉じた瞼を開いた瞬間に入り込んでくる光を再現している。

キャンパスの白色は、光が強く差し込み眩しすぎて何も見えない時の白色なのではないか。すべてをかき消した光の中で消えていたものが色彩を帯びてキャンパスに現れる。すべてを光で浄化した白色から、虹色の色彩が追憶のように現れる瞬間だった。キャンパスの白い空白は頂点を極めた一抹の閃光であり、その後に絵画が彩られるのだ。白紙はなんの作品にもならず、題名をつけることを許さない。それ

こそ、彼が抱いている芸術の野心に他ならない。唯一無二であり全てでもあった。彼に描かれる絵画はこの白い母胎から生まれ出る。じつと見つめさせ向き合う人間に何を描くのか問いかけ続ける。描き手はそれに応えて成功した時に魂の跳躍を得る事ができ、自分自身に出会う。但し、そこに至るまでの過程は盲目状態といつても過言はない。自らの罪に打ちひしがれて生を呪い、真実を見失い、全てに迷う。白色と向き合うことはこの穢れを祓うが如く神聖で清い祈りとなっていた。創造性に抱かれ、赦された自意識に安堵できるこの一時は宗教的な瞬間であり、生涯身を捧げても良いと思えるのだった。

白色の前では自分を含めて全ての世界との対話が求められ、その結論が白色に描かれる。描かれたものは自意識を通り抜けた世界であって、彼自身は空虚であり、描かれた世界は自分を通り抜けただけであって、自分のものとは到底思えないのだった。絵を描く時の彼の感覚は、穴の空いたところに風が吹いただけのようで、彼自身は空虚で、手だけが思考し自立して何かを描いていた。白色と対話が出来ているのは手だけであって、それ以外は全くの空虚だった。思考する手だけが饒舌に

光を語り出す。その光は外から刺した光ではなく、内から輝きだしたものではないだろうか。外から与えられた希望ではなく、それは内から潤い湧き出した。喜びの源泉見つける。夢をつくる無意識よりもさらに深く埋もれた場所から噴き出してくる幸福であり、彼にとつてはこれこそが希望の井戸となった。発見の喜びはこの一時が格別だった。そしてこの井戸は日常的に利用するようになり、あるのが当たり前で意識すらしなくなった。日々の生活の要となり、彼が絵を描くことを語るほどもない当たり前のものにした。

彼女は森の中のホテルに宿泊にきた。森に囲まれた、壁面が全てガラス張りのシンブルな立方体をした建物で、整然とした佇まいが有象無象な森に突如現れた冷たい理性のようだった。部屋の中で壁一面から採光しており、夕暮れの陽射しが横たわる光の三角柱を窓際に作っている。まるで屋外にいるように森は迫ってくるが、部屋の中は空調が効いて過ごしやすく、音もない。森を静かに見入る眼球の中に部屋が作られたように、森が眺められた。鈴虫の鳴き声は黄色く潤い美しく狂って高鳴り始めている。ちぎれてはぐれた雲が紫色にそまり、これからやってくる夜を飾っ

ている。外は綺麗に刈られた芝生が庭をなしていたけれど、その先の木々は剪定されておらず、ありのままの生を曝け出している。彼女はそこの中の一枚の葉をじっと見入った。電子顕微鏡で覗けばその中にミクロの宇宙が広がり、無数の物語を一枚の葉が持ち、春夏秋冬によつて過ぎ行く時間を語っている。一枚の葉に縮小された宇宙があるのだらうに、とたった一枚の葉に一つの生の次元があることに感じ入っていた。ただふと注意のピントを引き戻せば、無数の葉を一本の木が持つており、さらに引き戻せばたくさんの木が森をなし、山をなし、大地が雄弁に広がる。一枚の葉から次々と生の次元が広がり階層を成していて、一連の階層は通じあい、全体で一つの世界をも形成している。この自然における次元の階層の中に彼女自身も一部となつてしまえば世界全体と同化したように、全てが自分につながり、自分こそ世界全体でもあるという全能感と、全てが自分とさして変わらないという慎ましさの両方を感じることが出来る。ただし、それは彼女自身が世界と同化して消えてしまうことでもあり、世界でたった一人しかない自分を失う寂しさもあった。夜が更けてきたため、暗い外に部屋の灯りが照明になつてガラスに彼女自身の姿が映っていた。ガラスにうつる姿は世界そのものを複製しており、それは自然の中の一部

でも何でもなく、ただのイメージとしてそこにある。ガラスや鏡に映る世界は、自然の中にある世界の階層には組み込まれないため、世界と同化して消え行く喪失感から彼女を救うように別次元として際立っていた。ガラスに映る姿はあくまでも世界の一部を光で捕らえているだけで、他には何も実現させていない。ガラスに映ったイメージは現実から拒まれているけれど、現在の瞬間における存在意義は確かで、姿が無いからといって、まやかしではなく真実であり、現実と空想、形而下と形而上の境目にあり、どちらでもありどちらでもなかった。三次元にある世界の光を見ると、網膜で光は二次元に変換されているのと同じで、ガラスは網膜と同じように二次元と三次元のインターフェイスの役割を担う仲介者だった。ガラスを網膜に置き換えるなら、建物の中にいる彼女は意識そのものと言えないだろうか。そして、決定的に感じられたのは、彼女自身が観念になることで、全てが形容詞になってしまったような固有の実存が感じられず空虚感覚を覚えた。現実ほど幻想的なものは無いと思った。そしてその感覚こそが、ガラスや鏡に映っている世界に通じているのではないかと思えたのだった。

彼にとって、赤色は血と肉の生そのものを表していて、青色は空や海が持つ母なる理性、黄色は全てを育む光であり、黒色は無意識の混沌、白色は可能性というふうに、色そのものに彼なりの意味付けがあった。その時々で色に付けられた意味は変わっていくが、その変化は彼にとっては、色そのものに対して自分なりの理解を深めた結果だった。色彩に溢れかえった世界を、その感覚を持つて考えながら描くということとは、描いている対照に文脈を見出し、それを読み解いていく読書に通じる体験であり、世界そのものが物語をなしていた。意味を持ち始めた世界はむしろ単なる物としての存在意義を無くさせ、現実が空虚そのものになった。絵を描き、対象が持つ色彩の意味を感じるほどに、そこには因果関係がなく、まるで現実が物語となりフィクションに変わっていく、そこに感じた空虚は何もないのではなく、むしろすべてを遂げている空虚だった。現実の色彩が織りなす意味はこの空虚に膨れ上がって緊張して、張り詰め静止している。この緊張は彼がキャンパスに絵を描く時の緊張だった。現実を感じた張りつめた空虚は、全く間違いない完璧な絵画そのものとしてそこにあった。俳味。現実そのものがすべての意味を代弁しており、彼自身はその意味を感じるばかりの抜け殻になった。幻想となった現実にいる彼は、

死者のように形而上の世界に彷徨っているかのようだった。写真やビデオ、鏡にこの空虚は似ているけれど、確かな現実と不在のどちらにもおらず、現実とイメージの中間におり、その狭間の媒介者として絵画を描く彼はそこにいた。彼はシャーマンのように現実と現実を作り出した神がかった世界の間にいるのではなく、絵画や写真のような仮想世界ともいえる実体のないイメージと三次元の現実の狭間にいる。しかし、実体が無いという点では神々がいるような宗教的な世界と、仮想世界である実体のないイメージの世界は、形而上であるという点は共通している。彼にとってキャンパスにイメージの世界を描くことは、宗教的な役割に通じており、現実と形而上の世界の狭間に留まって絵を描く事は、彼にとって祈りそのものだった。

彼女はグーグルマップの画像で世界を散策していた。静止した現実を思いに任せて彷徨い、画像になった凍り付いた瞬間の中を思いに任せて動く。知覚したと思えばすぐに過ぎ去っていく敬遠な瞬間は、画像として捕らえられてその神聖さを失っており、張りぼてとなって画面に映し出された世界は、パソコンに潜む黒い虚空を隠すはりぼてのように思えた。彼女は夢のように世界中のどこまでも映すグーグ

ルマップの世界を蝶のように謳歌していたが、それに飽きていく程に、グーグルマップで検索されない領域を思い始めた。地球の好きな所にどこでも行く事が出来ることを体感すればするほど、どこにも属さない黒い虚空の存在を感じていく。世界へと繋がれて自由になるほどに、その黒さは黒の中でまたさらに黒くなっているように思えるのだった。オンラインでは彼女が求めるものは検索によって見つけられるが、深くそれを追えば追う程に検索できない領域の輪郭が浮き彫りになり、それが黒い虚空の世界を形成しているように思えた。彼女はこの見つけることができない領域の輪郭は、自分自身と同じ形をしているように思えてならなかった。黒い領域はいつも自分が求めて進んでいったところの裏側にあり、辿りつくことができない。その行き止まりに行き着いたのは、彼女の意思の結果であるし、その軌跡は彼女しか持っていない故に彼女自身の形を描いている。検索が不可能な領域が彼女自身になる。オンライン上に彼女自身をアップロードすれば、それは彼女そのものなのではないか。しかし、それは鏡に写った自分の顔を眺めるのと変わらない。鏡に映った彼女の誰も見ることができない後ろ姿のシルエットとして、彼女が感じている黒い虚空は想像でしかたどりつけない架空としてそこにあったのだった。

写真やビデオから現れてくる光は直接見る側の目に入り込む。絵画は絵の具で光を反射させる対象を描くことで見る側の目に訴える。絵画はあくまでも、見る側の目に光が辿り着くまでに、絵を見る描き手の主体性を通過したものが描かれるが、光そのものになった写真やビデオから目に辿り着く光は、それが光をそのままに映しているが故に、主体性は宿らず目に現実そのままの光が直接入りこんでくる。それは光として独立しており、物である対象としての実在はなく、純粹に表象ではない記号となっているのだった。彼にとっては写真によつてそのままの光になった光景は、彼の頭に浮かび上がる想像のイメージに似ている。彼の想像力で浮かび上がる現実も表層でしかない記号となっており、実在はしない。そのため、光として独立した写真は、彼には想像して思い浮かんで来るイメージとして鮮明に頭に直接入り込んでいくように感じられた。写真を見ている時、意識は見ている最中は何も想像せず、写真の景色と同調していた。写真に写った現実そのままに色づいた光は、黒く混沌とした意識の暗闇の中で鮮明に浮かび上がる。彼は混沌とした意識の暗闇から、イメージを抽出して絵を描いていたが、写真の光よつて、現実そのままの光が意識の中に入り込んでくることで、彼の記憶や想像で生まれてきていた現実のイ

メージは、その写真の光にとって変わった。そして、写真から発する、現実そのものの色づいてきた光は外部から彼の意識の暗闇に現れ出ると、次第に彼の思考に犯し初め、彼の思考と混ざり合い、彼の頭の中で編集され始めた。例えばある情景があった場合、光そのものになった景色は彼の暗い意識の中に照らされるが、その照らされた情景には彼の思考といった主観的な要素が混ざり込んでいった。物寂しく眺めたのであれば、情景は全体的に青みがかかり、曖昧で朧な憧憬のように感じたのなら、情景の輪郭もあやふやに滲み柔らかく描かれた。写真によつて現実をありのままに描く事が必要がなくなり、むしろ、現実から拒まれている彼自身だけが抱える何かが、現実に溶け込んで表れるようになっていった。つまり、それは印象派の絵画のようだったのだ。現実そのままの風景に、彼自身の独自の要素が盛り込まれて行った。その傾向にはいつそう拍車がかかり、遠近法へのこだわりもうすれ、彼の印象によつて物の大きさは決まり、対象の姿は彼の印象で切り取られて、現実に束縛されずに、キャンパスの好きな位置に配置されるようになった。写真に現れている現実そのままの光と、それに拒まれている主観的な想像力は、彼の意識である混沌とした暗闇の中で、意識の中で混ざり合い編集された。彼の絵は次第にキュ

ビズムや抽象を描くようになった。そしてそれらを描くことで、見る側の意識の中に絵画が直接入り込み、無意識の中へ働きかけることを目指した。描き手と見る側のコミュニケーションは両者の意識内だけで成立することを図り始め、表現の舞台は現実ではなく、混沌とした無意識の暗闇の中で行われることを目指した。

インターネットは、情報のネットワークが葉脈のように広がり、時が経つても完成などする訳はなく成長を続ける。彼女もそのネットワークの一部として、世界と時間を共にし、世界と一体となる感覚は、忘我の快楽があり瞑想に等しかった。想像や思考が作る粘菌や植物の根のように作り出す情報の体系図を広げ、全体が一つの意識を形成しているように感じられ、彼女は深くインターネットの世界にはまり込んで行った。情報体系の先端に行き着いた時には、成長を焦るように求める情報の更新を待ち望んだ。ただ最終的には、彼女自らでしかその先に辿り着けず、先端で留まることになった。その先端から先は検索が不可能な領域であり、彼女自身を更新しなければ、その先に情報体系の成長はないように思えた。他人がその先を更新するか待つ事が出来ない程に焦っていたし、それは彼女が求めるものではな

い可能性もある。追い求める先に彼女自身がならなければならなかった。パソコンで何を見ても、閲覧した履歴は自己実現のヒントにしかならず答えにはならなかった。彼女は真つ暗闇の自意識の中を瞑想して何か探さなければならなかった。この自意識こそが検索不可能な領域だった。鏡にもうつらない、現実そのものを支えている暗闇であり、ずっと彼女が感じていた漆黒の暗闇だった。目を閉じると、暗闇の中でイメージや言葉が現れてくる。これらのものは、彼女自身の世界から、意識もしくは欲求が検索をして現れでた結果だった。インターネットにおいても、この混沌とした暗闇が世界そのものを支えており、彼女の意思や欲求を検索した結果から、言葉やイメージが現れるという点では共通しているように思えた。実体のない形而上の言葉やイメージは、集合無意識ともいえるメディアに取って代わっている。真つ暗にした部屋で光を放つパソコンの光は、彼女を啓発するように照らしていた。

彼の絵画はありのままの現実から遠ざかり、主観性を帯びて形而上化していく。人の顔は、彼の偏在する視点にならない、ばらばらに描かれた。対象の輪郭はデフォルメされて、単純な線に古代の壁画や器のような曲線美や、直線や直角ばかりの幾

何学的な美しさを求めた。現実の景色を描く際の対象への緻密さは薄れ、対象は単純化が進んでいった。ありのままの自然が持つ現実の客観性がいかに複雑なものだったのだろうと、彼は思い返す。主観的な理解は、現実が持つ多くの要素を彼自身は排除と統合を重ねた結果だった。彼は自分自身はともシンプルなんだと安堵した。自分自身を点や線でもあるかのように単純化させた。ただ、自分が点なのか線なのかは分からない。点の連続が線となつて目に見えるが、点を拡大し続ければそこにはどこまでいっても長さがあり、線となり得る。もし点が長さなど持たず、存在すると仮定されるものであれば、点と線の関係も成立するはずだが、そんなことはなく、点や線は双方の性質を併せ持つて仮想と実存の両義を併せ持つ一つの矛盾になつてゐる。線の関係は仮想と実存の両方でもあり、どちらでもない。ただ、両方の間を永遠に行き来する何かが、衝動として絶えず彼を動かしているようだった。現実と夢の間で気は薄弱としてか細く、自分自身は矛盾そのものなのだと思う。これが幾何学的な街に感じる儚さのように思え、街は存在と不在の間を点滅しており、幻のように幽玄だった。

彼自身もガラスに透けたような幽体になって、空虚そのものの心地がしていた。今まで感じていた空虚も、この瞬間に通じている。時の経過はグラフのように直線的で、単純だった。ビルを眺めれば、格子状の建物はカレンダーの格子とさして変わらず、日々の生活が直方体のなかに収まり、それぞれの生活を表しているように思えた。走る車は時を征服して、遠くへ翔ける姿は詩的で、走り去る車のノイズは音楽的で新しく、美しいこれまでの楽器の音色が古臭く思えた。そして、街に住む人々が多ければ多いほど、街の幻想さは彼の中で増していく。人の中に埋もれば埋もれるほどに、個人の存在は希薄になり、延いては希薄さは全体にもおよび、儚さは増した。抽象化している街は、大きな意識の中にあり、現実と夢の境界で曖昧だったが、その狭間で起こる日々の生活は愛しく切なかった。

どこまで拡大しようとも、あらゆる対象が持つミクロコスモスには未知しか広がっていないが、そんなことはつゆ知らず、蝶は優雅にふらふらと舞う。彼女がどこまで核心に迫ろうとも、日常は当たり前のように続き、一辺倒で退屈ですらあった。日曜の午後の陽気に睡たい彼女は猫のように休んでいる。空の向こう側も、彼

女の自意識も、あらゆる対象の中にあるミクロコスモスの先も、結局は何もわからないのだと居直って、ただ光を浴びていた。公園では赤子の声が聞こえた。赤子は何もかも知らず、日常の退屈も知らない。分かってやっていることは自分が感じていることだけだ。赤子が眺めている世界は、何の経験も無いので彼女が見る景色とは全く違う。目には光だけが純粹に入り、判別できる意識も無い。現実だともわからず色彩だけを感じているのだろうか。まだ赤子の目には鏡に映る現実も、実際の現実も区別はついていない。ただ、自分と世界との葛藤だけがある。そして、目をつむった時の暗闇は、母親の子宮にいた時の暗闇とさして変わらないのではないか。彼女自身を感じていた暗闇も、赤子を感じる子宮の暗闇とさして変わらないように思えた。世界を生み出した暗闇は、彼女の無意識の中にずっと広がっている。無意識から湧いた意識の源泉として、地熱のように暖かく母親は自らが生んだ赤子を抱いている。女性として子を宿すことができる自分自身も、その温もりを与える側になるのだろうか、彼女は思いを巡らせた。母と赤子の関係と同じように、世界を母とし赤子を彼女とすれば、彼女の感じている暗闇は、自分自身の子宮の中にも宿っているのではないか。果てしなく何も無い虚空のような欠如と、創造の神秘を併せ

持った自身の子宮は、自分の意識とは別に、子宮の中に異次元が入り込んでいるようだった。吐き気がした。生理が近づいていた。

彼はまた以前描いていた大学の校内で絵を描いていた。風景はもう現実とは全くかけ離れて描かれており、書き殴られたような色彩が塗られて形などなしておらず、またそれを拒んでいたり、幾何学的な建物は石を砕いたようにアブストラクトに配置され、砕け散った結晶体をなしていた。街は彼の夢によって幻想的で本来の姿を失っていた。夕陽にくれる空の変化に彼の気分を同調させて、それを描こうとした。現実を抽象化させて描けば、物理的には早く描けるようになる。抽象的に描けば現実を写実することに拘っていた時には描けなかった、暮れていく夕陽を描けるようになった。夕暮れに高揚する心にまかせて、筆を滑らせる。そして、彼が感じたところ以外の景色は何も描かれず、すっかりと空白だった。彼が瞬間的に感じた最小限の部分しか描かれていない。以前この場所を描いた時には、現実を描こうとするあまり、現実までも絵画のように見えたが、今の彼が再びそうなることはない。むしろ、現実絵画にされるどころか、彼の意識の及ばない場所は何の色も塗られず

に真っ白だった。絵画を書く時に意識されなかった現実、今ではもう何でもなかった。現実はずべてが真っ白で、彼が意識したところだけが、色彩として現れている。彼だけの世界だけがあり、それ以外は真っ白で何もなかった。現実の何もかもを消し去って、彼自身が意識をしたところしか姿を現わせさせないというのは、孤独というよりは唯我独尊で傲慢ですらあるのだけれど、雪景色のように静かで冷えきった境地だった。

網膜に写されたありのままの現実と、彼が自意識だけで描いたこの絵の、どちらが本当の真実なのだろうか。このまわりついてくるような疑問など、振り払うように、追いつかれないように、意識は疾走していた。彼が自己実現を果たすことができるのは、疑問への答えとなるなんらかの意味ではなく、なんの意味も寄せつけない行為だけだった。その行為が目指す先には、ただただ白いキャンパスがある。彼と絵画の関係は、彼と現実の関係にも呼応する。彼の意識が及んでいない現実、白いキャンパスそのものであり、彼は白い世界に囲まれている。彼は自分の手が真っ白なキャンパスに色彩を描くように、白い現実の中で生きている彼自身が色彩にな

る。因果な生を重く引きずる自分の体など、消えてしまったような思いだった。

彼女はモルフォ蝶の研究を学校で進めていた。電子顕微鏡でも最早見えない、暗闇の先にある素粒子の世界に思いを馳せている。物質を細分化していつて最後に辿り着く粒子が何なのか、もしくは何も無いのか。ミクロコスモスと夜空の向こう側は未知という点で共通しており、その狭間にいる彼女自身は単なる疑問符や感嘆符になったようで、意味や言葉などは失い、満ちている空虚な感覚に浸っていた。この目にうつる実体の世界も、本当は何もないのかもしれない。黒色は何もわからない未知の領域であり、彼女自身の自意識の正体はわからないが確かに、ある。という感覚だけあった。それは孤独だった。目に見えるものすべてに素粒子のミクロコスモスが広がっており、実体が本当にあるべきものなのかどうかわからない。そして、夜空の果てもわからない。彼女は何もわからず、ただただ自身の実存に感じいていた。

彼女自身の意識は彷徨っていたが、そんな彼女を迎えてくれる我が家はある。家

は物質的にも精神的にも彼女の住処だった。彼女は研究室を出て帰路につくことにした。

彼女が建物から歩いて出て来た。この時は彼女にとっては、白い余白になるのではなく、意識は彼女に向けられたおり、始めは単なる黒点にしかすぎなかったが、近づくにつれて、ありありと鮮明に姿を現わした。彼女の姿は抽象化されておらず、現実の彼女そのものとして見えた。主観的な彼女だけの世界の中に、訪問者としてやってきたように思え、その姿に彼は驚いた。抽象化された彼の世界では、現実の彼女はすっかりと際立って見えた。むしろ、彼女だけの幻想の世界に現れた唯一の現実として現れた彼女を彼はデフォルメができず、彼女は一つの謎としてそこにいて、わからないからこそ、現実そのままの姿でしか彼女を見ることができなかった。彼は現実を目にして次第に我に帰って行き、そのきっかけが彼女だった。見過ごすことが出来なかった。自分だけの夢の中とも言える抽象の世界からの出口は彼女で、彼女が現実を代表している。自分だけの幻想の中に消えてしまいうような彼女にとって、彼女だけが現実へとつながっていた。彼は現実を拒むように自分だけの抽象的な世

界に入り込んでいたが、彼と現実をつなぐ存在は彼女だけだった。暗闇が生み出したように現れた彼女は、白い世界の中でくつきりと浮かんでいる。現実には彼女そのものだった。

彼女が建物を出た時、真っ黒な夜空は母体のように世界を暗闇で覆っていた。夜は子宮の中で世界を受胎しているようだった。世界は未だ発育途上なのか、時が過ぎ行く程に変化していく。もしも変化が止まるようであれば、世界は成体になったと言うべきだろうか。成長のスピードが速いのは幼年期だからだろうか。考える事は壮大だけれども、とりとめがない泡のように浮かんでは消え、そして意識は疾走していた。

彼女は大学のキャンパス内で、絵を描いている彼を見つけた。近づいて絵を覗き込むと、すっかりと余白ばかりの絵が描かれていた。夜の中で、そのキャンパスの白色部分だけ、現実から抜け落ちており、他の箇所は彼が感じた世界だけがそこに現れている。彼女は絵画そのものについては、抽象画か何かだろう、といった程度

にしか思わなかったが、その余白の白色が異様に思えた。この夜の暗闇の中で、このキャンパスの白色だけが、染まることを逃れているように見えた。黒色は、何もかもを飲み込んでいる夜のように対象を隠すが、この白色は、まぶしくて何もかもかき消している光のように思えたのだ。合わせ鏡の奥に感じ、夜空の果てやミクロコスモスの先に感じた全くの暗闇と、その白色は対照的だった。その白色はパソコンのディスプレイからもれ出てくるような白い光のようににも思える。彼のキャンパスに描かれている白色は現実を拒んでいる。その白色は幻想の正体で、夢の化身のようだった。彼の思考の中にはこの白色があり、この白色の中はまるで何も無いのだ。彼の存在自体もこの白色の世界に半分入り込んでいるようで、彼は現実の中に仮想で現れている半透明の存在にすら思えた。彼自身がそこにいるのだけれど、そこにいない仮想のようなのだ。彼のキャンパスだけは、彼女自身が感じている暗闇から逃れている。現実や自分自身すら覆う様な暗闇からの逃避所がそこにあった。

この白い世界の中に入れば彼女は自分自身の実存を忘れて、消えてしまえるのではないか。この白い世界に入り込んで、彼女は吹いている風のように自分の姿を消

して、おもむくままに世界の中を漂流したかった。絵画の中ならそうなれるのだろうか。テレビやインターネットの中に入ればそうなれるのだろうか。有名になって紙やディスプレイのようなメディアの仮想世界の中に入り込み、自分自身を被写体にして作品の中に入ればいいのだろうか。無限に広がる情報世界であるメディアの中に自分自身が入り込んで、実存を忘れた自分になりたい。空虚そのものになったかった。彼女は白い光りの中に入りこみたかった。

街灯の白い光は現実の何もかもを消し去っているようだった。

大賀拓己

1984年広島県生まれ。電子音楽家。

EDITABLE LIFE

2025年1月8日 第一刷発行

著者 大賀拓己

発行所 DEAD LOTUS MEDIA